

F13-H61-37ウ



1200500761927

3  
1

5  
6  
7  
8  
9  
10  
11  
12  
13  
14  
15  
16  
17  
18  
19  
20

始





314



F13  
H.61  
37



火野葦平著

山芋日記

小山書店



F13



919

75

目次

山芋日記

一

三福湯

三三

雨後

一八

船

二九七

傳説

三五

白き旗

三九



山芋日記



十二月六日

濱ノカヘリニ西口ノトコロニヨツタ。フト何ノ氣モ無シニ地下足袋ノ話ヲ  
シタトコロガ、古足袋ヲ一ツククレタノデ大イニ助カツタ。オマケニ酒ヲ一  
升クレタ。盆ト正月ガイツコニ來タヨ一ダ。

西口ハコノ前カラノタノマレ物ノラン間ガマダ出來ヌト見エラ、カンナク  
ヅダラケノセマイ仕事バデ、セツセトノミヲ動カシテキタ。仕事ノ事ニ成ル  
ト何時デモソ一ダガ、ヒゲモソラズ、目ヲ赤クハラシテ、何時モノクセノ下  
クチビルヲ黄色イ上齒デカミカミシテキタ。スコシヤセタ様ダ。濱ノ歸リノ



ヨゴレ姿デ俺ハ表カラノゾイタ。其ノヒヨウシニ入口ニ有ツタ水タマリニ右足ヲツツコンダ。地下足袋ガ破レテキタノデ冷タイ水ガ指先カラ入りコミ、赤ギレニシミテ思ハズ、アイタト言ツタ。西口ガ長イカホヲ上ゲテ、ヒドイ足袋ヲハイトルヂヤナイカト言ツタ。コノゴロハ直グコレデナト言ツテ、俺ハグチヲコボシタノダ。コレハ買ツテカラマダ一ト月ニモナラヌノニ、モ一ポロポロニナツテ弱ツテキタノダ。マツタクコノ頃ノ地下足袋ト來タラ、持チノ悪イノニハカプトヲヌグ。高イ上ニコレダ。水ニ附ケルト直グニ破レテシモーシ、ヌイ目ガチキニホコロビテ、ワクドデハナイガ、バクリバクリダ。其レデモ配給ノ有ルマデハ手ニ入ランノデ、タタミ糸デカガツテ見タリ、ワタヤ糸クヅヤ布ヲツメコンダリシテ我マンシテキタガ、ゴツゴツノヌレ石炭ノ中ニ入ルノデ有ル故、何ニモナラヌ。コノ寒サデハ足ガ千ギレルヨ一ダ。

イツソ又昔ノヨ一ニワラヂニセネバ仕様ガ有ルマイ。コノ頃ハガソリント一セ一デ自動車ガ動カズ、廢物ニナツテキタ人力車ヤ馬車ガ又出テクルシ、オ時世ガ後モドリシタ様ダ。地下足袋ハ有ガタカツタノデ、エンリヨ無ツ貰フ事ニシ、今度モ一ケタラ一バイ買フヨト言ツタラ、ア一忘レテキタ、君ガ來タラヤラウト思ツテノケテオイタ、ト言ツテ、西口ハ白鶴<sup>ハクソウ</sup>ヲ一ビンクレタ。アマリ景氣ガヨイノデ俺ガアキレタ顔ヲシテオルト、心バイスナ、何ボカ水クサイカモ知レンガ、アヤシイ酒ヂヤナイ、友枝サンガクレナサツタンダ、ト西口ハ言ツタ。市參事會員ノ友枝サンガ今度白山神社ニラン間ヲ奉納スルトカデ、其レヲ西口ハ彫ツテキルノダ。友枝サンハ辰年ノカンレキトカ聞イタノデ其ノ御祝デアロー。半分ホド出來上ツテキル。黒ガキニスゴイ目ヲ光ラセタ一ヒキノオコゼニニタ龍ガ大キナ口ヲアケテ牙ヲムキ出シテキル。雲



ノウヅ卷ノ中ニ鯉ノウロコノ様ナカラダガウネリ、玉ヲツカンデキル手ノ爪  
ガスルドイ。出来上ツタナラバスバラシイ出来ダロート俺ハ感心ヲシテ見タ。  
スルト、何時モ西口ノ仕事ヲ見ルタビニ頭ニウカブ事ガ又フツト頭ニウカン  
ダ。ソレハコンナニリツバナ藝ヲ持ツテキル男ガドーシテ何時マデモウダツ  
ガ上ラズ、コンナローコーニモー何十年モノ間貧乏グラシヲツツケテキルノ  
デアローカトユ一事ダ。俺ハ無學デ教育ハナイガ、西口ハ中學モ出テキル男  
ダ。シカモリツバナ藝術家ダ。藝ガ身ヲ食フトユーガ、藝ノタメニオチブレ  
タノデアローカ。ロクデモナイ奴ガ少シバカリノ金ヲモツテ旦那ヅラシテキ  
ルノヲ見ルトゴ一腹ダガ、西口モモツトメグマレテ良イデハナイカ。シカシ、  
其ンナラ、俺ハドーダ。何ヲ俺ハ人ノ心バイヲシテオルノダ。俺ハ無學ノ上  
ニ藝術家デモ無い。シカシ、俺ハ正義ノ士ダ。シカシ、正義デハ飯ガ食エ無

イ。シカシ俺ハ不幸デハ無い。不幸カモ知レヌ。シカシ、悲シクハ無い。サ  
ビシイ時モアル。シカシ、タノシイ時モアル。何ヲボンヤリ考エテキルンダ。  
君ハコノ頃時々影ガウスイ時ガ有ルゾ、年ノセーデモアルマイガ元氣ヲ出セ、  
ト西口ガ言ツテ笑ツタ。マタ齒ガ抜ケテキル。元氣ヲ出セトコチラガ言ハレ  
タノハ意外デアツタ。コツチカラ言ツテヤロート思ツテキタノダ。ソコデ、  
君コソ元氣ヲ出セ、トオーム返シニ言ツテヤツタ。俺ハ元氣ダヨ、君モモ一  
五十ノ坂ヲコシタンダカラアマリ無理ヲセンガエー、其ノ白鶴デ一バイヤツ  
テ今夜ハ早目ニネルガエー、御レイハイランカラ、今度ツイデノ時ニ山芋デ  
モ持ツテ來テクレ、ト西口ハ、君モ年トツタト言ハンバカリダ。俺ハドーモ  
其レガ氣ニ食ハナイノダ。西口トハ一トマハリホドチガウガ、氣ガイハマダ  
マダ負ケヌ。西口ノ家ヲ出ルト日ガ暮レタ。ウシロデ子供ノ泣キ聲ガハゲン



クシタ。常坊カ良坊カドツチカヨク判ラナカツタ。

家ニ歸ツテ見ルト、廣公ハ居ナカツタ。御カミサンニ聞イテ見ルト、カエツテカラスグ何處カニ出テ行ツタト言ツタ。御カミサンハウス暗イ土間デ赤ン坊ニ乳ヲノマセテキタガ、シブ柿色ノホホベタヲフクラマセテ、ヒドク不機ゲンノ様子ダ。廣公ハマタ酒ヲ飲ミニ出タノカモ知レヌガ、其レガ何カ俺ノセーミタイニ御カミサンハ思ツテキルラシー。メーワクナ話ダ。廣公ノ好意デ居ソーローハシテキルガ、ドーモアマリ居心地ガ良クナイカラ、其ノウチニミコシヲ上ゲルトシヨ。出ルトスレバ西口ノ所ニ又アトモドリセネバ目下ノ所俺ノ行ク先ハ無イガ、西口トハ一シヨニ居ルト必ズケンカヲスルカラ、ヨクヨク考エテカラノ事ニシヨ。俺ハ二ジヨノ俺ノ部屋ニ入りコングダ。俺ハオミヤゲノ白鶴ノビンヲカカエテ、サテコレハ、カンヲツケタモノ

カ冷ヤデヤルモノカト思アンニクレタ。廣公サエ居レバ何ノコトハ無シニ御カミサンニカンヲツケテ貰フノダガ、ドーモ、御カミサンダケデハ其レガ言イニクイ。ソコデ冷ヤデヤルコトニキメテ居ルト、御カミサンガ、其レ飲ムンデシヨ、ツケテアゲマシヨ、出シナサイ、トトナリカラ例ノキンキン聲デ言ツタ。御カミサンハ床ノユルンダ土間ヲメリメリ言ハセテ入ツテ來テ、ダマツタママ俺ノウデニ赤ン坊ヲナゲル様ニ抱カセ、右手ニ白鶴ノビンヲ下ゲ、左手デハダケタ胸ヲカキツクロイナガラ臺所ニ行ツタ。臺所トノ界ノヤブレタ障子ヲアケタ時、シユントユ一鐵ビンニ湯ノ鳴ル音が聞エタ。其レヲ聞クト俺ハ何故カヤレヤレトユ一氣持ニナツタ。赤ン坊ハスツカリ乳デマシクシタノカ、キヨロリトシテ奴胤ノヨ一ニ兩方ニ張ツタブクブクノワタ入レノ袖ヲシキリニ動かシテキタ。コレハ廣公ガ出征中ニデキタ子ダ。出征



スル時ニハランデキタノガ、何カノカゲンデ早出ヲシタ。八月子ハ育タンデモ七月子ハ育ツト昔カラユーガ、出ルノガアマリ早カツタノデ心バイシタニモカカハラズ、クリクリトヨク太ツタ。鼻ガヒライテ天井ヲ向イテキル所ガ廣公ニソツクリナノハ妙ダ。俺ハフツト俺ニモコンナ赤ン坊ノ時ガ有ツタノダロト思ツタ。スルトズツト昔ノ事ガ何時ニナクナツカシク思ヒ出サレタ。俺ハ赤ン坊ノカホヲ見ナガラ、ツイニ女房ヲ持タズニ五十ノ坂ヲコシテシマツタ自分が何故カオカシクテタマラナクナツテ來タ。自分デモ其ンナ事ガ何故オカシイノカワカラヌノニ、ムヤミニ腹ノソコカラオカシサガコミアゲテ來テ、トウトウ我マンシキレズ、笑ヒ出シテシマツタ。俺ハビツクリシテ聲ヲコロシタ。御カミサンニ聞エルトワルイト思ツタカラダ。所ガ、前ノオカシサノ上ニ、五十ノ坂ヲコシタ男ガ居ソーローヲシテ其處ノ御カミサンニ其

ンナ氣ガネヲスル事ノオカシサガ又カサナツテ、ドーニモ胸ガ苦シクナツテ來タ。俺ハトトト馬鹿ノヨーニ、ハツハツハツハツト笑ツテシマツタ。赤ン坊ガキョトントシテ俺ヲ見タ。ソシテ急ニクシヤクシヤトカホヲヨガメテ泣キ出シタ。俺ガアヤシテキルト、メリメリト御カミサンガアラハレテ、俺ノ前ニ何かドサリトナゲ出シ、カンガツイタヨ、飯ニシナサイ、トブツキラポーナ調子デ言ツタ。へい、ト俺ハ答ヘテ、ナゲ出サレタ茶色ノフットローヒロイ上ゲタ。田川廣作殿方鈴木大助殿ト肉太ナ字デ書カレテ有ツタ。手紙デハナイカ。コレハドーシタ事ダロー。俺ニ一タイ何處カラ手紙ガ來ルノダ。モ一二十年モ手紙トユ一物誰カラモ貰ツタ事ガ無イ。手紙ヲクレルモノガ俺ニハモ一居ナイハヅダ。俺ハ目ヲウタガツタ。ハトロノ其ノフットロー裏返シテ見ルト、大日本政治革新黨第八支部準備會トアツタ。何ダ、其ンナ



事ダロート思ツタ。俺ハ苦笑シタ。開ケテ見ルト、トリーシャ版刷リノ一マイ  
ノ紙ガ入ツテキル。コレハ何時カ西口ヤ久富サンガ熱心ニ話シテキタ豊島サ  
ンノ革新黨ノ趣意書ダ。入黨勸告ノ文ノ後ニ、入黨申込書ガ點センノ先ニツ  
ケテアツタ。俺ハコノ手紙ヲ手ニシテ、サテ、コレヲ印サツシタノハ久富ダ  
ローガ、俺ノ所ニヨコシタトユー事ハ一タイドロー次第デアローカト思ア  
ンヲシテキタ。俺ハコノトリーシャ版トインキノニホイニハ何カ參ルヨーナ氣  
持ニナルノダ。俺ハ何年モ前ニコノ港デオコツタ賃銀爭議ノ事ヲ思イ出シタ。  
俺タチハ毎日トリーシャ版ノインキデ手ヲマツ黒ニシナガラビラヲ刷ツタ。飯  
ハイランノ、カンガ冷エルヨ、ト、キンキン聲ガヒビキ、俺ハドヤサレタヨ  
ーニトビ上ツタ。

十二月十日

鑑札ノ事デ組合ノ人ト喧嘩ヲシテシマツタ。コンド無鑑札仲仕ハ絶対ニ使  
用シナイトユー事ニナツタノデ、俺ハ自分ニ一枚貰ヒタイトユー事ヲ申シ込  
ンダノダ。何ケ月カ前ニコノ制度ガ出來タ時ニスダ俺ハ下附ヲ受ケタノダガ、  
コンドハ其レヲ全部整理シテ、前ノヨーニ甲種乙種ノ區別ヲセズ、ミンナ甲  
種鑑札ニ改メテシマフトユー事ダ。甲種鑑札ハ部屋仲仕ニ下附サレテ居タノ  
デ、コンドハツマリ部屋仲仕以外ハ使用シナイトユーノダロー。ソレハ、バ  
クニタチノ悪イ奴ガ居ルノデ仕様ノ無イ事デアローガ、俺ニハキユークツナ  
事ダ。組合ノ人ニ以前ニ受ケタ木札ヲ示シテ、新シイノヲホシイトユート、  
コンドハ警察デモ非常ニヤカマシク言ツテ居ルカラカンタンニ出スワケニユ



カナイ、防諜上ノカンケイモアル事ダシ、組ニ所屬シナイ、バヅクニハーサイ  
出サン方針ニシテ居ル、君モ何處カノ部屋ニ入ツタラドーダ、ソシタラ何時  
デモ手續ヲトツテ上ゲヨ、ト組合ノ人ハ言ツタ。其レハワカツテ居マス、  
シカシ私ハ昔カラ部屋ニ屬サズニ獨自ノ立場デヤツテ來タノデス、十年ノ上  
モ沖仲仕ヲシテキマスガ、コレデモ仕事デハ誰ニモ負ケズ、ドノ組ノボーシ  
ンカラモ重ホーガラレテ來テ、時ニハ仕事ノ忙シクテ人間ノ足りナイ時ナド、  
人ヲ寄セテ來テヤツタリ、現場ノ世話モシテヤツタリシテ來タノデス、今サ  
ラ何處カノ部屋ニ入ル事ナドハ自分トシテハ出來マセン。組合ノ人ハ笑ツテ、  
其レハ君ノ氣分モ判ラヌ事ハ無いガ、規則ガソーナツテキルノダシ、君ガド  
ーシテモ鑑札ガホシイナラ、何處カノ組ノボーシンニデモ一バイ買ツテ何組  
所屬ト表面ダケデモシテ貰ツタラドーダ、君ノ事ダカラ其レハ僕モミトメテ

アゲテ警察ノ方ニモ都合ヨク話シテオコ。アリガトーゴザイマス、シカシ、  
私ハソーユー情實ヲモツテスル事ガ一番キライナノデス、表ト裏トガアツテ  
其レヲ使ヒワケルナドトユー事ハ、私ニハ出來ナイ事デアリマス、ドーシテ  
モソ、ユー不正ナ事ヲシナケレバ鑑札ガ貰ヘンノデスカ。鈴木君、君モオト  
ナデハナイカ、言葉ガチガイハシナイカ、其レハ不正トカ情實トカユーヨ  
ナギヨーサンナ事デハ無いデハナイカ、僕ハタダ便宜上ノ事ヲ言ツタダケダ。  
ヨロシイデス、判リマシタ、ト俺ハ言ツテ立チ上ツタ。鼻ノ下ニチヤツブリ  
ンノ様ナヒゲノ有ル組合ノ人ハ、マー上手ニ世ワタリヲシタ方ガトクダヨ、  
何モ角ヲ立テルホドノ事デハ無い、君ハ理クツガドーモ多スキテ、何ニヨラ  
ズ物事ヲヤハラカク理解スル事ガ少ナイ、ソレガ君ノ缺點ダ、マー良ク考エ  
テ見ナサイ、ト、俺ノ背中ニ言ツタ。



濱ニハ冷タイ風ガ吹イテキタ。空ハドンヨリ曇ツテキタ。今日モ荷役ハ相當ニ忙シイラシク、籠オキ場ノ附近ニ澤山何時モ六尺ヲ持ツテ立ツテキル仲仕ノ姿モ見エナイ。傳馬船モ古クナツテ修ゼンセネバイカン様ナノガ四五ハイ残ツテキルダケダ。舟ト煙トウインチト汽車ノ音ガ港ニ一バイニ成ツテ、港ゼンタイガーバイ引ツカケテ磯節デモウタツテ居ル見タイニ、上機ゲンニ見エタ。軍需景氣カ何カ知ランガ、金ヲモークケテキルノハ一タイ誰ダロー。俺ハ組合ノ事務所デノコーフンシタ氣持ガ冷タイ風ニホホベタヲナデラレルト次第ニ下ツタ。一バイヤリタクナツタガ、今日ハマダ一錢モモークケテ居ナイ。鑑札ノ制度ガ六ツカシクナレバ、俺モイヨイヨ沖仲仕ヲ止メナクテハナラナク成ルダロー。止メルトオシイ商賣デ有ルワケデハ無イガ、長年身ニ附イタ仕事ニサヨナラスル事ハ何カ寂シクモアル。シカシ、情實ヤ不正ナ事ヲ

シテマデ、仲仕ノ仕事ニミレンハ無イ。組合ノ人ノユーヨーニ其レハヒヨツトシタラ不正デハナイカモ知レヌ。シカシ、其ンナ面倒クサイ事ハモーゴメンド。其レニシテモ、俺ハ何時ノ間ニ沖仲仕ヲ自分ノ身ニツイタ商賣ダト考エル様ニ成ツタノダロー。俺ハ間ニ新聞配達モヤツタリ、人形作りニモナツタリ、果物屋モヤツタリ、店員ニ住ミコンダ事モ有ルノニ、本職ハト聞カレルト何時モ立チ所ニ沖仲仕ダト答エタ。思ヘバオカシナ話ダ。沖仲仕ノ人情ニホレテキタノダローカ。海ヤ舟ガ好キデ有ツタカラダローカ。不器用ナ俺ニニアイノ仕事デ有ツタカラダローカ。其ノミンナダツタノダロー。誰カエライ人ノ言葉ニ、イヤシイ人ハ居ルガイヤシイ職業ハ無イトユーノガ有ツタ事ヲオボエテキルガ、ソレニシテモ、名門ノ流レデアアル俺ガ北九州三界デシガナイ沖仲仕稼業ヲシテキルトユー事ハ一タイドシタ事デアロー。西南役



ニ官軍ノ六番隊長トシテ奮戦シタ親父ガ草場ノカゲデ、伴大助ガ石炭仲仕ニ  
ナツテウラブレテキルト知ツタラドonnaカホヲスルダローカ。親父ハキツト  
怒リハシナイダロー。俺ガ悪イノデハナイ。世ノ中ガ悪イカラダ。寫眞デ見  
タ親父ノ顔ガマザマザト俺ノ頭ノ中ニウカnde來タ。俺ハ親父ノカホガ俺ト  
チツトモ似テキナイノヲ何時モ不思議ニ思ツタ。俺ガ丸ガホデアルノニ、親  
父ノカホハ長イ。カホノゾーサクモスツカリ何カラ何マデチガツテキル。シ  
カシ、親父ノ性格ガトテモガンコデ、曲ツタ事ガ何ヨリモキライデアツタ所  
ガ俺ト少シモチガハ無カツタトユ一事ダ。親父ハ俺ガ十一ノ時死ンダ。ト一  
ト一死ニ目ニモ合ヘナカツタガ、俺ヲ引き取ツテ育てテクレタ伯父ガ、何時  
モ俺ガダダヲコネハジメルト、コノ子ハ一テツナ所ガ大五郎トソツクリダ、  
血ハアラソヘヌモノダ、トログセノヨ一ニ言ツテキタ。鈴木大五郎トユ一名

ハ日本ノ歴史ノ中ニチャント残サレテキル名ダ。ソノ名門ノ末デアル俺ガ何  
時マデモ沖仲仕デモ有ルマイ。鑑札ガウルサクナツタノガ良イ見切り時カモ  
知レヌ。俺ハ明日カラ山芋ホリヲセンモンニヤル事ニシヨ一。

ソ一思フト、モ一俺ハ山ニ行キタクテタマラナクナツテ來タ。コノ間、西  
口ニヤクソクシタ山芋モマダ持ツテ行ツテキナイノデ、今日ハ掘ルナラ、何  
時モヨリヨケイニ掘ラネバナラヌ。ソ一思イナガラ、俺ハ道具ヲ取リニ家ニ  
歸ツタ。今日ハバスニ乗ル五錢ノ金モ無イ。半道モ有ルノヲ歩イテ歸ツタ。  
スルト家ノ一町バカリ手前ニ來タ時ニ、ドーモ變ダト思ツテキタ空モヨ一ガ  
マスマス悪クナリ、雨ガフリ出シタ。俺ハ氣ガクサリ、家ニカケコンデ寢コ  
ロndeシマツタ。



十二月十二日

朝何カドナル聲デ眼ガサメタ。廣公ガ裏ノ小屋ノトコロデ何カ大キナ聲ヲ出シテキル。何事カト思ツテ俺モ出テ見タ。表ハマダマツクラダ。廣公ガ照ラシテキルカイ中電トノ光ノ中ニ宇土組ノ帳面方ノ友サンガ立ツテキル。馬鹿ニスルナ、俺モ歸カン兵ダ、オチブレテモドロボーハセン、ト廣公ハカホガマツ赤ニナルホドコーフンシ、齒ヲムキ出シテドナツタ。氣ノ弱イ無口ナ男ガ珍シイ事ダ。ヨツボド復ガ立ツタノダロー。イヤ、其ンナツモリヂヤ無カツタノダヨ、ウチノ仲仕ヲシラベルツモリデコノ長屋ニ來テ見タンダ、アンタノ家トハ知ランヂヤツタ、マア、カンベンシテクンナ、ト友サンハ困ツタ様ニ頭ヲ下ゲテ、バツガ惡ソーニ背ノヒクイカラダヲフリフリ、手ニ持

20

ツテ居タカイ中電トモトモサズ、暗ヤミノ中ヲ歸ツテ行ツタ。氣ガ附クト雨ガボツントホホベタニ當ツタ。

廣公ハヨツボド蟲ニサワツタト見エテ、今日ハ仕事ハ休ミダ、ト言ツテ家ニ入ルト、フトンノ中ニモグリコンデシマツタ。俺モ何ニモ言ハズニフトンノ中ニ入りコンダ。ウスツベラナフトンダガ、マダ先ホドノヌクモリガ有ツタ。コノ頃ドロボーガ多イトユーノハ困ツタ物ダ。荷役ニ使フローブヤチエーシナドガ最近ヒンピントシテ無クナルトユー事ダ。然モスツカリ籠ニ仕立テテ有ルノガ、ローブダケ抜イタリ、チエーシヲ引キ切ツタリシテ、仕事マギワニナツテ役ニ立タズ、アワテテ修ゼンシタリスル事ガ何ベンモアルソーダ。コノ頃ノ物ノネダンハ一タイドール成ツテキルノカ知ランガ、ドーモフニ落チカネル事ガアル。古ローブハ仲仕ノ荷役ニハドーシテモ無クテハナラン

21



モノデハアルガ、モトハ一貫目八十錢モ出セバイクラデモ有ツタモノダ。今  
ハ一貫目ガ六圓モスルソダ。新シイローブガトーセーノ値段デ四圓シカシ  
ナイノニ、古ローブガ六圓モスルトユーノダ。ソレデ、仕事スルヨリモ、一  
貫目ノローブデモ賣ツタ方ガヨイノデ、悪イ奴ガローブヲヌスムノダロー。  
コノ間、古道具屋ニ古釘ヲ買イニ行ツタラ百目四十八錢トユーノデビツクリ  
シタ。新品ノ釘デ十五錢シカシナイノニドユーワケダ、ト聞クト、グヅグ  
ヅユーナラ買ウテモラワンデモエト言ツタ。アトデ聞イタ事ダガ、商賣人  
ハ新シイ釘ヲ買ツテ來テ、潮水ヲブツカケテ、サビヲ出シテ古釘トシテ賣ル  
ノガ有ルソダ。キミヨーナ世ノ中ニ成ツタモノダ。ソ一言ヘバ、コノ頃、  
山芋ガ一貫目三圓トユーノダカラ自分ナガラアキレル。何モ俺ガ作ツタ値ダ  
ンデハ無ク、買フ方ガ其レデ買フノダカラ、俺ガ何モエンリヨスル事ハナイ

ワケダガ、アマリ高く賣レルト一寸氣ガサス。一貫二貫ハ何時行ツテモ掘ツ  
テ來ルガ、コレハ別ニウルサク文句ヲユー奴ガ居ランシ、自分モタノシミダ  
カラ、コンナ良イ商賣ハ一寸類ガナイト言フベキダロー。俺ガ其ンナ詰ラヌ  
事ヲ考エテキルト、大サン、ト、ネタト思ツテキタ廣公ガトナリカラ聲ヲカ  
ケテ、俺ヲドロボーアツカイスルノハ宇土ノイヤガラセラシー、俺ガドロボ  
ーシタト思フワケデモ有ルマイガ俺ヲコノ長屋カラ出ソト思ツテキルノダ  
ヨ、コノ長屋ハ宇土ノ若イ者計リナノニ俺一人ガヨソノ仕事ニ出テキルノデ  
邪マニナルノダ、俺ガ出征前マデハコノ長屋ニ宇土組ハ半分モ居ナカッタノ  
ニ、歸ツテ見ルト、宇土組デナイノハ俺一人ニナツテキル、コノ頃ハ人夫ガ  
フツテイデ折角見ツケテモ家が無ケレバ來ナイノデ、俺ヲ出シタイノダロー、  
外ノ者ハミンナ出シテシマツタノダケレド、サスガニ俺ハ兵隊ニナツテ出征



シテキタノデ、ルス中ニ追ヒ出ス事ハヨ―セナンダノダ、俺ガ歸ツテ來テモ  
歸カン兵ナノデ表ムキハ何モヨ―言イキランノダ、其レデイヤガラセヲシテ  
出テ行カセルコンタンダ、今其レガ判ツタ、馬鹿ニスルナ、宇土ガナンボ軍  
需ケ―キデ羽ブリガ良クナツタカモ知レンガ、俺モ兵隊ダ、歩兵上等兵ダ、  
誰ガ出ルモノカ、畜生。ド―モ無口ナ廣公ニシテハオカシイト思ツテキルト、  
ドタドタトハゲシイ音ヲ立テテ、廣公ガコチラノ部屋ニコロゲコムヨ―ニシ  
テトビコンデ來タ。廣公ハ俺ノマクラ元ニベタント坐リコミ、サア、オ前モ  
一バイヤレ、ト言ツテ俺ノ前ニ茶ワンヲツキ出シタ。サツキカラ、フトンノ  
中デダイブヤツタト見エテ、廣公ハモ―マツ赤ニナツテ、苦シソ―ニフ―フ  
―トジユクシクサイ息ヲ吐イテキタ。開イタ鼻ヲ中心ニクシヤクシヤトカホ  
ノゾ―サクヲヨセ集メテ、サカンニ舌打ヲシタ。其レカラ、コレハオ前ノ白

鶴ヂヤツタナ、マー、エーワ、コンド倍ニシテモドスワイ、ト言ツテ、天井  
ヲムイテ、ハツハツハツ、ト、笑ツタ。何か穴ノアイタ様ナ、ガランド―見  
タ様ナ笑ヒ聲ダツタ。俺モ茶ワンヲ取り、冷ヤデグツトアホツタ。冷タイア  
マイ酒ガジ―ント胸ニヒビイテ通ツタ。御カミサンハ居ルハツナノニ、トナ  
リノ部屋ハコトリトモ音ガシナカツタ。

雨が土砂ブリデ、一日ネテキタ。

十二月十五日

煙草ヲ買イニ角マデ出ルト、ヒヨツクリ御里サンニ合ツタ。フイダツタノ  
デハガユイ事ニ胸ガドキドキトシタ。御里サンハ何時モ洋髪ナノダガ今日ハ



日本髪ヲユ―テキタ。カホガ四角クテ色ガ白イノデ、何時カ、ト―フ姉御ト  
言ツテ笑ツタ事ガアルガ、目元ニキミヨ―ナ愛キヨ―ガ有ル。出合イガシラ  
ニ、ヤ―、ド―シトルカナ、アンタモ達者カネ、ト兩方カラ一ツペンニ聲ヲ  
カケタガ、其ノママスタスタスレチガツタ。御里サンハ黒エリヲカケタ青  
イ着物ヲ着テキタガ、スレチガイサマ、ブ―ント良イニホイガシタ。赤イ風  
呂シキ包ミヲ持ツテキタ。五六間歩イテカラ、フツト俺ハ立チ止マリ、フリ  
返ツテ御里サンヲ呼ビ止メタ。御里サンハ聞エナイノカ、スタスタト行クノ  
デ、胸ハドキツクシ、止メヨ―カトヨツボド思ツタガ、モ―一ペン大キナ聲  
デ呼ンデ見タ。御里サンハフリ向イテ、何カ用、ト言イナガラ、モ―目ヲ細  
クシテ笑ヒガホニ成リナガラ引キ返シテ來タ。一寸話シタイ事ガアルノダ、  
シカシ、コンナ所ノ立チ話シデハ困ルガ、ト俺ハ言ツタガ、御里サンガ何モ

言ハズニ俺ノカホヲジツト見ルノデ、ドギマギシ、アワテタヨ―ナ氣持ニ成  
ツテ、西口ノ事ダガ少シ考エクレネバ困ルデハナイカ、ト一氣ニ言ツテシ  
マツタ。何ガ、ト御里サンハフニ落ちヌトユ―カホヲシタ。何ガト言ツテ、  
アンタガ西口ノ所へ色ンナ物ヲトドケルノデ、家テ―ソーギガ起ツテキルノ  
ダ、アレハ止メナサイ、ト俺ハ言ツタ。へ―、ソナ事デスカ、アタシハ何  
モ惡氣デシテキルワケデハナク、自分ノ氣持ダケ仕タイ事ヲ仕テキルダケ  
ヨ、ソノ事デ家テ―ソーギガ起ローガ起ルマイガ、アタシノ知ツタ事ヂヤ―  
ナイワ、勝手ニサセトイテ頂ダイ。然シ、御里サン、ソレハ危險思想トユ―  
モノダ、アンタノ氣持ハ判ラナクハ無イガ、何モ面白クナイ問題ノ起ルヨ―  
ナ事ヲシイテセンデモヨイデハ無イカ。危險思想デモ何デモヨイワヨ、アタ  
シガ好キデスル事、ホツトイテ頂ダイ、アンタ、ヤキモチヲヤイテキルノネ、



ホホホ、ト御里サンハアザケルヨーニ笑ツテ、下駄ノ音ヲカランコロソ鳴  
ラシテ行ツテシマツタ。俺ハボカントシテ其ノウシロ姿ヲ見送ツタ。一體ド  
ーシタトユーノダロー。俺ガ誰ニヤキモチヲヤイテキルノカ。笑ハシチャ  
イケナイ。

西口ハ昔御里サンニ大ソ一惚レテキタ。然シ、其ノ時ニ俺ハ西口ニ、御里  
サンハ色女トシテハ良イカモ知レヌガ、所帯ヲ持ツテ其ニ苦勞ヲスル女房ニ  
ハ不適當ダロート忠告シタ。女ヲ知ラヌ俺ガソ一ユーノヲ西口ハ笑ツテ聞イ  
テキタガ、ヤツバリ自分デモソ一思ツテキタノカ、進メラレルママニ、今ノ  
御カミサンヲ貰ツタ。西口ガ御里サンニノボセテキタ時ニハ、一タイ御里サ  
ンガ西口ノ事ヲドー思ツテキタノカ見當ガ立タナカツタ。御里サンハ、西口  
ノ近所ノラムネ屋ノ二番目ノ娘デアツタガ、其ノ頃ハ或ルカキ舟ノ仲居ニナ

ツテキテ、相當ノ收入モ有ツタラシク、佛像ヤ表札ナドヲ彫ル事ヲ商賣ニシ  
テキタ貧乏ナ彫物師ノ西口ノ事ナド、眼中ニハ無イデアロート俺ナドハ思ツ  
テ居タ。ツマリ西口ハ氣ノドクダガ、磯ノアワビノ何トヤラ、トユー奴デア  
ツタワケダ。其ノウチニ、御里サンハ石炭商ノ誰ヤラトドーアルトカ、近ク  
誰レ其レノ二號ニナルトカ、ソ一カト思フト、活動寫眞館ノ三味線引キト別  
府ニ行ツテ居ツタトカ、ソナ色ツポイウワサガ次カラ次ニ有ツテ、金モ無  
ケレバ男ブリモアマリバツトシナイ西口ノ事ナド問題ニサレテキル風デモ無  
カツタ。タダ、何處カラカ風ノヨ一ナ話デ、何時カ、御里サンガ、自分ハ商  
賣柄止ムヲエズ、イヤナお客ニモ笑顔ノ一ツモ見セネバナラズ、其ノタメニ  
有リモセヌ浮キ名ヲ立テラレタリシテキルケレド、金ノ有ル無シデ男ニケジ  
メヲ附ケタリハシナイ、ホント一ハ西口サンノ様ナ男ヲシイ人が好キナノダ、



ト言ツタトユー事ヲ西口ハ誰カラカ聞キ、ヒトリ心デナグサメテキタ。其ン  
ナ事ハ、誰カガシホレテキル西口ヲ見カネテ、ウレシガラセニ言ツタ事ニ相  
違ナイガ、女ニ惚レタ者ハ土左衛門ト同ジデ、ワラデモツカムトユー氣持デ  
有ツタノダロー。其ノ頃、西口ハ一人デサビシソニ酒バカリ飲ンデ居テ、  
アマリ仕事ヲシヨートシナカツタ。俺ハ或ル時、豊後ノ方ニ旅ヲシタ。其レ  
ハ、深田トユー所ニ有ル炭焼ノ家ニ代々ツタハル祕法デ花炭トユー物が出来  
ルトユー事ヲ聞イタカラダ。其レハ陽明天皇時代カラノ由緒アル傳説ガアツ  
テ、ヒカクの根キヨノ有ル物ノヨニ思ハレタノデ、俺ハ胸ニモエル事業慾  
ヲオサエル事が出来ズ、トモ角、實地調査ヲスルツモリデ出カケタノダ。其  
ノ時ハ例ニヨツテ一バイヤツタ上ゲ句、議論ヲハジメ、喧嘩ニナツテ西口ノ  
家ヲトビ出シテ居タノデ、小倉ノ停車場デ汽車ヲ待ツ間ニ、西口ニアテテ長

イ手紙ヲ書イタ。其ノ時ニ御里サンノ事ガドーニモ氣ニナルノデ、手紙ノオ  
シマイニ、イラヌ御世話デアルガ、御里サンノ事アキラメタカ、アキラメヌ  
カ、君ノ將來ノタメ、アユー種類ノ女ハ早く心ヲ鬼ニシテアキラメタホー  
ガ良イト思フ、コノ事メイテシテユーノデハ決シテナイ、ト書イタ。俺ガ  
豊後カラ歸ツテ來ルト、西口ハ今ノ御カミサント結婚シテキテ、モ一腹ニ子  
供ガ入ツテ、近ク生レルト聞イタノデ、早イ仕事ヲヤルワイトアキレルト共  
ニ、大イニヨロコಂಡ。オトナシイ西口ノ御カミサンハ、次々ニ子供ヲ生ン  
デ、今ハ、四ツニナル常吉ト、去年生レタ良吉ト二人ダ。ドツチモ兵隊サン  
ダ。所ガ一タイ、女ノ心トユー物ハドーユー物ダロー。西口ガ女房ヲ貰ハヌ  
前ニハ、ケンモホロロノ様子ヲシテキタ御里サンガ、上ノ子ガ出来タ頃カラ、  
シキリニ西口ノ仕事場ヲ晉ヅレルヨニナツタ。其ノタビニ色々な物ヲ持ツ



テ來ルノダ。其レハ酒ノ時モアレバ、萩モチノ時モアリ、モナカ、栗マンジ  
ユ一、ウニ、淺草ノリ、ナド色ンナ物ヲトドケテ來ル。大テイ自分テ來ルノ  
ダガ、ヒツツメ髮ノ仕込ミノヨ一ナ少女ガ持ツテ來ル事モ有ツタ。モトモト  
近所同志デハ有ルシ、幼ナ友達デモ有リ、言ハバ何デモ無イヨ一ナ事デハ有  
ルガ、ドーモ一種奇妙ナ具合デアツタ。コトニ、御カミサンガイヤナ思イヲ  
スルノハ當リ前デアル。誰カラカ結婚前ノ事ヲ聞イテ知ツテ居タ御カミサン  
ハ、自分ガ來ル前ニ、西口ト御里サンハ何カ有ツタ様ニ思フラシ一。俺ハ其  
レヲ極力ベンカイシタガ、ヤツバリ半信半ギノ様子デアツタ。西口トテモ、  
何モ言ハナイガ、モ一スツカリ御里サンノ事ハアキラメテ居ルハズニ違イナ  
イガ、御里サンノ好意ハ別ニコトワル風デモ無カツタ。何時カ、濱ノ歸リニ  
西口ノ仕事場ニ寄ツタラ、御里サンガ居テ、二人デケラケラ笑ヒナガラ何カ

面白ソ一ニ話シテキタ。鹽センベイノ入ツタ竹ノ折包ミガ其處ニアツテ、黄  
色イ茶カスノシミタ素焼ノ湯ノミ茶ワンガ二ツ土間ニアツタ。煙草ノ吸イガ  
ラガ何本モ火鉢ノ灰ニ棒グイノヨ一ニ列ンデササツテキルノハ、モ一御里サ  
ンガ來テカラダイブンニナルノガ判ツタ。ソバデ常坊ガハナヲタラシテ寒ソ  
一ニ鹽センベイヲバリバリトカジツテキタ。御カミサンハルスラシカツタ。  
相カワラズ、セ一ガ出ルワネ一、マア番茶デモオ上ンナサイヨ、ト御里サン  
ガ俺ノ石炭デヨゴレタ姿ヲ見テ言ツタ。ウスイクチビルノ間デ金齒ガビカリ  
ト光ツタ。御里サンハ入口ノ硝子窓ニカラダヲ半分ノセテ左ヒジヲ着キ、右  
手デハスバニ煙草ヲ吹カシテキタ。俺ハムツトシタノデ、ア一、大キニ、俺  
ハ腹ガ一バイダ、アンタモ何時マデモ油ヲ賣ツテ居ランデ早ク店ニ歸ンナサ  
イ、西口ハ限ツタ仕事ヲウケ合ツテ五分ノ時間モ惜シイノダ、常坊モ其ンナ



鹽センベ食フナ、小父チヤンガエーモノヲ買ツテヤル、ト言ツタ。大ヘンナ、ケンマクネ、ハイハイ、退却シマスヨ、ト御里サンハ窓ニモタレテ居タカラダヲ起シテ、イタズラツ子ノ様ニ、片目ヲ細クシテ、西口ニ合圖ヲシタ。西口モ其レニ答ヘル様ニウナズイタ。俺ハコノ時ホド西口ヲツマラナイ奴ダト思ツタ事ハ無い。俺ハヨツボド馬鹿野郎トドナリ附ケテヤローカト思ツタ。御里サンハ黒エリニ鹽センベイノカケラノ附イテキルノヲ、一寸氣ドツタ手附キデハタキ落シナガラ、又ネ、トユー様ニカホテ言ツテ歸ツテ行ツタ。俺ハマダ御里サンガ見エナクナラヌ内ニ、西口、君ハ一體ドーユー考エナノカ、女ハドーデモ良イガ、君ノ其ノニエ切ラヌ態度ガ一バンイカンノダ、ハツキリシロ、ト言ツタ。アトデソー思ツタガ、ソー言ツタ俺ノ様子ハ食ツテカカル様デ有ツタロー。西口ハ、ゴマカス様ニ、タダ、ハツハツハツ、ト笑ツタ。

其レハ、君ニハ俺ノ氣持ハトーテイ判ラヌトユー意味ノ様ニ取レタ。其ノ後モ御里サンハヤツバリ西口ノ所ニ來テ居ル様デアツタ。御里サンガ最近思フ男カラ捨テラレテ自殺シカカツタ事ガアルトユー事ヲ前ニ聞イタ事ガ有ル。男トユー物ハミンナウソ附キダ、トヤケノ様ニ言ツタトユー事モ聞イタ事モアル。ソナ事ハドーデモヨイ。然シ、御里サンノ方ハドーデモ良イガ、西口ノ氣持モ俺ニハ了解ガ出來ナイノダ。西口ノ御カミサンカラ、何度モ、コノ頃、御里サンハウチニ來ルダケデハ無く、何處カウチノ人ト外デ合ツテキルノデハ無いデシヨーカート聞カレタ。其ノタビニ俺ハ強ク打ち消シタガ、ホントーハドーモハツキリシナカツタ。何時カ、西口ニテツテイのニ意見ヲシナクテハナラヌ。

町ニ出ルト、植木屋ニ小サイ梅ノハチガ有ツタノデ買ツタ。廣公カラ小使



イラ少シ拜シヤクシテ來タノダ。手頃ナ鍬ヲ見ツケテ買フツモリダツタノダ  
ガ、梅ニナツテシマツタ。福ジユ草ヤ、松竹梅ノ鉢ガタクサン列ンデ居ルノ  
ヲ見テ、モトオ正月モ近イ事ニ氣附キ、アワテテ買フ氣ニ成ツタ。マダ半分  
月有ルケレド、無錢ノ大夫ノ俺ニカツコーノコンナ梅ノ鉢ガ、又何時見ツカ  
ルカ判ランシ、明日ト言ツテ居ツテハ人ニ買ハレテ仕マイソーナノデ、カホ  
見知リノ植木屋ダツタシ、負ケテ貰ツテ手ニ入レタ。其レニシテモ、八十錢  
ハ安カツタ。ウス緑リ色ノ花ビラ形ノ鉢モ上品デ良イ。

十二月十九日

大日本革新黨ノ異動研究會ヲヤルカラ傍チヨーセンカト、西口ガ昨日合ッ

タ時ニ言ツテ居タノデ行ツテ見ル事ニシタ。所ガ、西口カラカン單ニ聞イタ  
ダケダツタノデ、大テイ判リソーナ物ダトユーツモリデ出カケタ會場ガト  
トードーシテモ判ラナカツタ。七時ト聞イテ行ツテ、ウロウロシテ居ルウチ  
ニ日ガ暮レテシマツタ。白山神社ノ下ト聞イテ居タノニ、何處デタヅネテモ  
武林トユ一家が見ツカラナカツタ。

自分トカンケーモ無イ事ヲ何モソー血マナコニ成ル事モ無イト、少シ馬鹿  
ラシクナツテ、白山神社ニ登ツタ。高イ石段ヲユツクリ登ツテ行クト、意外  
ニ息ガ切レタ。コンナハヅデハ無カツタガト思ツタガ、ドーモ矢ハリ苦シカ  
ツタ。二十段位ヅツ一ト切リニ成ツテキルノガ、其處デ一寸休マナイト息ガ  
ハヅンデ其ノ先ガ登レナイ。年ノセイカナトフト思ツタ。氣ガ附クトヨイ月  
ダ。今マデコンナ大キナ月ニ氣ガ附カナンダノハオカシイガ、雲ニデモカク



レテ居タノダロー。十三夜位ダロー。其レトモ十七夜カモ知レヌ。ドツチカ知ラヌガ、左肩ガ少シ缺ケテ居ルダケダ。コーコート明ルイ。目ノ下ノ町ガ青イ海ノ底ノ町ノ様ダ。町ノ中ニピラピラト火ガ光ツテキル。神社ノマハリハウツソートシタ木ニツツマレテ、シンカント静マリ返ツテ居ル。俺ハ神社ニヒザマヅイテカシワ手ヲ打ツタ。何ヲイノツタラ良イトユ一事モ無イノデ、タダウヤウヤシク拜レイヲシタダケダ。又、月ノ中ニ出タ。サクサクト砂ガ鳴ツタ。俺ハ其ノヘンヲグルグルト歩イタ。空氣ガ冷タイ。何トユ一良イ氣持ダロー。俺ハ洗タク石ケンデ心ノ中ヲ洗ハレタ様ナ氣持ガシタ。俺ハガケブチニ立ツテ、ザワザワシタ人達ガ一バイ住ンデ居ル町ノ方ヲ見下ロシタ。俺ハ胸ヲ張ツテ見タ。俺ハシント心ニシミ通ル様ニ、コノ時、自分ガマゴ一方モ無キ名門ノ出身デ有ル事ヲハツキリト感ジタ。ザマア見ロ、ト俺ハ下ニ

見エル町ニ向ツテ言ツテ見タ。何か家ニ歸リタク無クナリ、又シバラク其ノヘンヲ歩イタ。

十二月二十二日

山ニハ空風ガ吹キ荒レテ居タ。枯レ草ガ波ノ様ニザーザート鳴ツテキタ。俺ハ佐原山ノ裏ノ開コン地ヲヌケ、地藏山ノ方ニ行ツタ。コノ間、誰モ氣ツカ無イ所ニ山芋ノツルガ出テ居タノヲ見附ケテオイタカラダ。何時カ、沖ノ仕事ニハクツモリデ西口カラ貰ツタ地下足袋ヲハイテ行ツタ。コレハ裏ガ再セイゴムデハ無イノカ、フミ立テルト實ニヤワラカク氣持ガ良イ。ダンダン島ノ丘ガイクツモ重ナリ、其ノ向フニ青ダタミノ様ナ響灘ヒビキナガガ見エタ。白帆ガ



五ハイ浮ビ、燈臺ノ向フヲ大キナ汽船ガ黒イ煙ニカクレル様ニ成リナガラ西ニ向イテ走ツテ居タ。朝鮮通イノ連ラク船ダロー。地藏山ヲコエテ水源地ノ方ニ行ツタ。寒イノデ山ニハ誰モ見エ無カツタ。コノ間ノヒドイ雨デ何時モハ水リヨ一ノ少ナイ水源地ニ赤土ノマジツタ赤イ水ガ一バイニ滿チテ居タ。水源地ノ岸ニ板ヲ出シテ、一人ノ百姓女ガ赤イ腰卷ヲ出シテ、山ノ様ニツンダ大根ヲシキリニ洗ツテ居タ。俺ハ笹ヤブヲワケテ谷ニ入ツタ。スルト目ノ前ニハゼノ木ガ有ツタノデ俺ハビツクリシテ一サンニ其ノ下ヲカケ抜ケタ。小サイ時ニヒドクハゼノ木ニ負ケタ事ガアルノデ、今ダニハゼノ木ハ恐イノ

見當ニチガイハ無カツタ。素人ガ見ルト、モ一枯レテ千切レテキル山芋ノツルハ判ラナイノダガ、俺ノ目ニハ、マルデ白イ紙ノ上ニ赤インキデ印ヲ附

ケテオイタ様ニ、アリアリト山芋ノアリカガ見エタ。自マシデハ無イガ、俺ハ山芋ホリハ天才デハ無イカト思ツテ居ル。久富サンヤ西口ト一シヨニ來テモ、彼等ハ俺ガオシエテヤラネバ、目ノ前ニアル芋モ探シ出ス事ガ出來ナイ。俺ハ鍬デ土ヲオコシ、何本カ掘リ出シタ。土ノ冷タイヤワラカサガ手ノ平ニサワルノハ、何トモ言ヘズ良イ氣持ダ。何本目カニゴ一ジョ一ナ奴ニ出合ツタ。初メノ五寸ホドハ何ナク出タガ、其レカラ先ハ大キナ石ガアツテ其ノ間ニモグリコンデ居ル。土ヲ掘リ起シテ見ルト石ト思ツタノハ大キナ岩デ、土ノ中ニドレダケ埋レテ居ルノカ判ラナイ位ダ。コレヲ待ツテ居タノダ。コンナガンコナ山芋ヲイタメズニ掘リ出スホド樂シミナ事ハ無イ。コンナ奴ニカギツテ大モノニチガイ無イ。俺ハ鍬デ土ヲ出來ルダケ深ク掘リ、小石ヲドケナガラ、鐵ノボートデ岩ヲコネタ。アマリ強ク動カスト山芋ヲ折ル恐レガ有



ル。ミミズガ何匹モ出テ來タ。モ一蛇ガ冬眠ヲシテ居ルノデ、其レガ俺ノ一番ノニガ手ダガ、黒イコゲタ様ナ土ノ色ヲ見テココニハ居ラント安心シテ居ルノダ。俺ハアマリ蛇ハ好キデ無イノデ、芋ガ有ツテモ蛇ノ居リソ一ナ所ハケ一エンスル事ニシテ居ル。直感デ俺ニハ蛇ノネテ居ル所ハビント頭ニ來ルノダ。俺ハト一ト一苦心ノ果、其ノ大岩ヲ動カス事ニ成功シタ。五尺ヲコエル様ナ長イ山芋ガ俺ノ前ニ姿ヲアラワシタ。岩ト岩トノ間ニハサマレテ、其ノ芋ハフクレ上ツタ所ヤ、細クナツタ所ガアチラコチラニ出來、細イ所ハ中指位シカ無ク、良クコレガ切レ無カツタ物ダト我ナガラ感心ヲシタ。深く掘ラレタ穴ノ中ニネテ居ル其ノ大山芋ヲ俺ハナホモ注意深くヒゲヲ切りナガラ抱キ起シタ。其レヲナガメテ居ルト、妙ニクチビルノアタリガムヅムヅシテ來テ、俺ハニヤニヤト笑ツテシマツタ。氣ガ附クト俺ハ汗ヲジツクリカイテ

居タ。背中ガゾゴゾト寒氣ガシテ來タ。マダ芋ノ有ル事ハ判ツテ居タガ、コノ次ニ殘シテオク事ニシ、コノ大山芋ノ征伐デマンゾクシテ山ヲ下リル事ニシタ。今マデ取ツタノダケデモ先ヅ二貫目ハ大丈夫ダ。俺ハムシロニ丁ネイニ荷ヅクリシテ、ガイセン將軍ノ様ニ山ヲ下ツタ。

十二月二十五日

友枝サンカラタノマレテ居タ龍ノラン間ガ出來タトユ一ノデ、西口ト二人デカツイデ持ツテ行ツタ。友枝サンハ居ナカツタガ、奥サンガ出テ來テ、一パイカンヲ附ケテクレタ。俺達ハ少シばかり良イキゲンニナリ、奥サンガ何時モ二人ハ仲ノヨイ事ネ、ト言フノヲ背中ニ聞イテ表ニ出タ。俺達ハ列ンデ



歸リナガラ議論ヲ初メタ。其レハコノ間カラ合フタビニ繰リ返シテ居タ事デ、  
今ニ初マツタ事デハ無カツタガ、コノ問題ニ成ルト、フダンハ煮エ切ラヌ西  
口ガ目ヲ光ラシテ別人ノ様ニ熱心ニ成ルノハ不思議ダ。西口ハイライラシタ  
時ニヨクヤルクセデ、黄色イ上齒ヲムキ出シテ下口ビルヲカミナガラ、大キ  
ナ聲デ食ツテカカル様ニドナルノダ。其レハ例ノ大日本革新黨ノ事デ有ル。  
コノ間カラ西口ハ俺ニ入黨ヲ進メテ居ルノダガ、俺ガハツキリ返事ヲシナイ  
ノガ齒ガユイラシー。コノ非常時局ヲ救フ物ハ新シイ革新勢力ノ外ニ無イ。  
コレマデノ様ナ中途半バナ政治デ月本ガ直面シテ居ルコノ難カンヲ突破スル  
事ハ絶對不可能ダ。ハコー一字ノ精神ヲ基本トシ、腐敗ダ落シタ政黨ヲホロ  
ボシ、官僚獨善ノ政治ヲウチ破ツテ行カネバ日本ノ新シイ進路ハ無イ。生命  
奉カン、經濟奉カン、ノ精神ガ眞ニ日本ヲ生カス。アジャヲ一丸トシタ大家

族主義ヲ打チ立テネバナラヌ。ソーユー風ニ、西口ガ口ノ中ニツバヲ枯ラシ  
テ言フ事ニ對シテ、俺ハ、其レハ成ルホド一理ハ有ルガ、眞理デハ無イ、俺  
ハ眞理ノ前ニハクツ伏スルガ、眞理以外ノ事ニハタツサハル事ハゴメンダ、  
ト言ツタ。コレハ眞理ダトモ、リツバナ眞理ダ、ト西口ハ強ク言ツタ。イヤ、  
眞理デハ無イ、其レハ指ドー原理ダ、ト俺ハ答ヘタ。眞理ダカラ指ドー原理  
ト成ツタノダ。イヤ、眞理デ無クトモ指ドー原理ト成ル事ガ出事ル。西口ハ  
吐キ出ス様ニ、君ハ昔カラ理論好きダ、其レガ君ノ缺點ダ、ト言ツタ。イヤ、  
斷ジテ、理論好きデハ無イ、好キトカキライトカ言フ事デハナイ、思ツタ事  
信ジル事ヲイツハラズ言フダケダ、ト俺モ大キナ聲ニ成ツテ言ツタ。俺達ハ  
少シノ酒デメイテイシ、何時ノ間ニカ二人共喧嘩スル様ナ調子ニナツテ居タ  
ノダロー。イヤ、コンナ時代ニセイ然トシタ理論ハ必要デハ無イ、必要ナ物



ハ實踐ダ、ナドト、ナホモ叫ンデ居ルト、俺達ノヨコヲ自轉車ニノツテ通り、カカツタ男ガ、俺達ニ向ツテ、ツバラ吐キカケル様ニ、何カ言葉ヲ投ゲツケテ過ギタ。背廣姿ノ目ガネヲカケタ男デアツタガ、ワメカレタ時ニハハツキリシナカツタガ、其レハドーモ、コノ非常時ニヒルノ日中ニヨツバラツテ居ルトハ何事ダ、ト言ツタ様デアツタ。西口ト俺ハシバラクキヨトントナツテ、自テン車ノ遠ザカツテ行クノヲナガメテキタ。

十二月二十九日

新聞屋ガ集金ニ來タ。テツテーシタ貧乏暮シノオカゲデ、アリガタイ事ニ、新聞屋ノ外ハセツキニナツテモ借金取りガ來ナイ。新聞ヲ讀マヌト時世ニオ

クレルカラコレハ止メルワケニ行カナイ。コノ間大山芋ヲ收カクシタ時カラ四五日ツヅケテ山ニ行ツタノデ、今年ハ何ボカ小使イ錢ヲ持ツテ正月ヲ迎エル事が出來ル。廣公ノ方ニモ居ソーロー代ヲワタシタシ、新シイシャツモ買ツタ。スフ入りデ六圓五十錢モ取ラレダガ御時世ダカラ仕様ガ無イ。明日ハサンバツニ行コー。コノ間買ツタ梅モ枯レズ、生キモ良イカラ、春ニナツタラ花ヲ開クダロー。其レモ樂シミダ。

廣公ノ赤ン坊ガ少シ御ナカヲコワシテ寝テ居ル。昨夜ハビービードンドント何ベンモヤラカシテ居タノデ、醫者ヲ呼ビニ行ツテ來テヤツタガ、注射ヲシタセイカ、今日ハオサマツテキル様ダ。早産兒ダカラヨツボド氣ヲ附ケヌトアブナイト醫者カラ言ハレタノデ、廣公ハ今日ハ仕事ヲ休ンデ朝カラ附キキリニ附イテキル。何時モ酒バカリノンデ居ルノニ、昨日今日ハ馬鹿ニ神妙



ダ。ヤツバリ子供ハ可愛イノダロー。

十二月三十一日

本年モトート幕レタ。八時、九時、十時。モー二時間タテバ除夜ノカネガ鳴ル。

俺ハ今カラ一バイヤツテ、山芋ヲカケテ年コシノソバヲ食フノダ。山芋トユー奴ハコーユー奴デ無イトイカヌ。大根下ロシデスルト、ドロドロニ水ノ様ニトケル奴ハダ目ダ。スツタアトガクリクリト固マツテ玉ノ様ニナリ、ハシデツマンダ位デハ切レン位ノ奴デ無イトイカヌ。コレニスジョー油ヲカケテ食ベルト、味ガ何トモコタエラレヌ。

所デ、コノ一年俺ハ一タイ何ヲシテ來タトユーノダ。人間ノ定命ヲ五十年トスレバ、俺ノ明日カラノ命ハ又モ追イ願イダ。ダガ、俺ハ、誰ヤラノマネデハ無イガ、百二十五歳マデ生キルトユー、熱ト意氣トヲモツテ、死ンダ氣デハタラクノダ。活動スルノダ。思フバカリデハ無ク、先ヅ實踐スルノダ。ヤレルマデヤル外ハ無イ。

長イ間ノ修レンデ、我意ヲコロス事ハ相當ニオボエタ。コレデ酒ヲツツシム事ヲオボエレバコレニコシタ事ハ無イガ、別ニ樂シミモ無イ俺ダ。俺ガ少シバカリノ酒ヲ飲ンダ所デ、政府モ、戦地ノ兵隊サンモ其ンナニヤカマシクハ言ハンダロー。コノ頃、カリユー界ノニギヤカデ料理屋ナドガハンジョーシテ居ル事ハビツクリスルホドダソーダガ、ソナ事ニクラベタラ、俺ガ一人デチビチビト酒ヲ飲ム位ハ何デモ無イ事ダ。其レデ思イ出シタガ、廣公ハ



少シ酒ヲヤリスギル様ダ。何度モ言フノダガ少シモキカナイ。來年ハ一ツテツテイ的ニ意見ヲセネバナラス。

デハ、コレヨリ、山芋デーバイヤルトシヨ。

### 謹祝紀元二千六百年元旦

先ヅ壯ケンデ年ヲ迎エテオメデト。

カホヲ洗ツテ東方ヨト拜。上天氣デ、大キナ御天道様ガ屋根ノ上ニ上ツテ來タ。何時モ今頃ニナルト聞エテ來ルザワザワシタ町ノ物音モ、今日バカリハ聞エナイ。靜カナ物ダ。今日ハ工場ナドモミンナ休ミノハズデ、煙トツカラモ煙ハ出テ居ナイノダガ、空ニハ矢ツバリウス黒イカスミガカカツテキル。

去年ノバイ煙ガ消エズニ残ツテ居ルノダロ。コレハ北九州ノ名物ダカラ何トモ仕様ガ無イ。氣ノドクナノハ元旦ソトソ、カホヲススダラケニシナケレバ出ラレナイ御天道様ダケダ。

俺ハコンドハ西ヲ向イテ、西方ニチンザマシマス白山神社ニ手ヲ合ハセタ。何時カ異動研究會ノ晩、道ニマヨツテ、月ノ中ヲ歩イタ時ノ、サクサクトユ一砂ノ音が耳ノ中デ又聞エル様ナ氣ガシタ。

サテ、今年コソハト思フ。毎年ノ事ダガ、何ト言ツテモ新年トユ一物ハ氣分ガ新シクナツテ良イ物ダ。思ヘバ俺モ旅ニ出テカラ三十餘年ニ成ル。思ヘバ長イ間ノルローデ有ツタ。然モ今ノ俺ハ一タイドー成ツテ居ルノカ。人間五十ノ坂ヲコシテ女房モ無ク子モ無ク、タツタ一人デ正月ヲ迎エルトハサビシイ事デハ無イカ。俺ハ今ハ何ダロ。山芋ホリダロ。俺ハ名門ノ末流ダ。



俺ノ親父ノ名ハ歴史ニ残ツテキル。俺ハ今五十年ノ過ギテ來タ生涯ヲフリ返ツテ見ル。思ヘバ苦勞ノ連ゾクダツタ。五十年モノ長イ生活ノ間ニ俺ハ、アノ時代ガナツカシー、ト思ヒ出ス様ナ時ヲ持タヌ。思ヒ出シテ見レバミシナ苦シンデ來タ思ヒ出バカリダトユー事ハドーシタ事ダロー。其ンナ事デ人間ガ良ク生キテ來ラレタ物ダ。俺ハ今ヨリモハルカニ良カツタトユー時ヲ持タヌ。モー一ペンアユー時代ニ歸ツテ見タイトユー思ヒ出ガ無イ。其ンナラ俺ハ今ヲ非常ニ不幸ダト思ツテキナイノダカラシテ、今ヨリモ上等デハ無カツタ今マデノ五十年ハ俺ニ取ツテハ幸福ナ一生ダツタノデハ無イカ。ソノモ言ヘル。其レハトモ角苦勞バカリヲシテ來タ長イ間ノ生活ガ馬鹿ニ樂シク思ヒ出サレルノハドーユーワケダロー。マー何デモ良イ。今年モーツ熱ト意氣トデ生キヨ。

昨夜ノ一升ノ酒ガ三合バカリ残ツテキタ。今日ハ廣公モ休ミダカラ、一シヨニ食ゼンニ附イタ。廣公ノ部屋ノ古ボケタカベニハ支那ノ地圖ガハツテアツタ。何時カノ新聞ノ附ロクニツイテ來タ戦局地圖ダ。所々ニ赤エン筆デ印ガツケテ有ルノハ廣公ガ附ケタノダロー。廣公ハ何故カチツトモ戦争ノ話ヲシナイガ、自分一人デ地圖ヲナガメテハ色々ト思ヒ出シタリ、又、戦友達ノ事ヲ考エテキルノニ違イナイ。其ノ他、戦地デ苦勞シテ來タ廣公ニハ色々トフクザツナ感ソーガ有ルダロー。廣公ガマルデ戦争ノ話ヲシナイノハ不思議ダ。今マデ仕事ノカンケイデ目ツタニ一シヨニ飯ヲ食ベタ事ガ無カツタ。廣公ハ棧橋仲仕デ時間ガ一定シテ居ナク、ヒル出タリ夜出タリシタ。御カミサンモ今日ハ機ゲンガ良カツタ。赤ン坊モドーヤラ峠ヲコシタラシー。カン病ヤツレニ青イカホヲシテキタガ、ソバニ寝カシテ有ル赤ン坊ヲ見ナガラ、モ



一 小鼻ガヒクヒクト動カナクナツタカラ安心ヨ、熱ガアル時ニハ息ガハズン  
デ小鼻ガ生キ物ノ様ニヒクヒク動イテ恐カツタ、ト言ツタ後デ、小鼻ト言フ  
ケンド、オ父ツチヤンニテ大鼻カモ知レンナ、ナドト笑談ヲ言ツテ笑フ  
位氣持モナゴンデキタ。醫者ハ早出ノ子ハタン生スギクライニ病氣ニカカル  
ト大テイ六ツカシート言ツテキタシ、十中ノ八九マデアキラメテキタノデ廣  
公夫婦ノヨロコビハ思イヤラレタ。オ前カラ貰ツタ山芋デ今朝ハ麥トロニシ  
タヨ、トロロデツルツルトカキコム様ナ具合ニ今年ハ運ヲカキコモ、ト廣  
公モ上機ゲンデアツタ。俺達ハツマラヌ笑談ヲ言イ合イナガラ何バイモ麥ト  
ロノオ代リヲシタ。マー、今日ハアンタモ御休ミダローカラ御飲ミナサイ、  
トドーシタワケカ、何時モナラモーコレ位ニシトキナサイ、ト言フ御カミサ  
ンガ德利ヲカカエ上ゲテ俺ニシキリニサイソクヲシタ。俺ハ杯ヲ受ケテ二三

バイツツケ様ニグツト飲ンダガ、フト思イ附キ、杯ヲオイテ、廣公、俺ハ去  
年カラオ前ニ言ハト思ツテ居ツタノダガ、オ前ハ少シ酒ヲヤリ過ギハセン  
カ、俺ハオ前ガ酒ガ好キナ事モ知ツテルシ、何かオ前ガ心ノ中ニ不平ガアツ  
テ酒ニマギラシテキルトユー事モワカラン事ハ無い、シカシ、アンナニヤツ  
テハ第一カラダガ持テンシ、オ前モモ一人者デハ無いノダカラ女房ヤ子供  
ノ事モ考エ無クテハイケナイ、何か不平ガアルノナラ酒ヲ飲マナクトモ別ニ  
方法ガ有ローデハ無いカ、俺モ今年ハ謹シムツモリデ居ルカラ、オ前モ少シ  
ツツシマヌカ、好キナ物ヲ止メロト言フワケデハ無いガ、無茶ナ飲ミ方ハヒ  
カエタ方が良い、ト、言ツタ。廣公ハ杯ヲ口ノ所ニ持ツテ行ツタママ、少シ  
ウツムキ加ゲンデ俺ノ言フ事ヲ聞イテ居タガ、俺ガ言イ終ルト、杯ヲ下ニオ  
イテ、アリガト、成ルダケソーユー事ニシヨ、ト力ノ無い聲デ言ツタ。



廣公が必ず反對スルニ違イ無イト信ジ、ア一言へバコー言ツテヤロー、コー言へバア一言ツテヤロー、ト、様々ノ言葉ヲ用意シテ勢コンデ居ツタ俺ハ、アテガ外レテ、返ツテサビシイ氣持ガシタガ、仕方ナシニ、其レガ良イ、其レガ良イ、ト言ツタ。妙ニ酒ガマヅクナツタノデ俺ハ西口ノ所ニ年始ニ行ツテ來ルカラト言ツテ立チ上ツタ。

門松ヤシメカザリモ例年ヨリハ少ナク、何時モハタクサン町ヲウロツイテキルヨツバライノ姿モサスガニ見エナカツタ。妙ニシンミリシタ正月ダ。人通りモ少ナク、手持無サタノ様ナ町ノ白イ道ガ妙ニ目ニ附ク。

西口ハ居ナカツタ。御カミサンガ居テ、西口ハ友枝サンノ家ニ年始ニ行ツテマダ歸ラヌトユ一事ダツタ。御カミサンハメヅラシク丸マゲニユツテ居タ。表ノドブ板ノ所デ常坊ガ一人デ日月ボールヲ持ツテアソンデキタ。マダ自由

ニナラヌ様子デ、赤イ玉ガ一ペンモ乗ラナカツタ。ドレ、小父チャンニカシテ見ロト俺ハ言ツテ、常坊ノ手カラ日月ボールヲ取ツタ。イイカ、コーユ一風ニヤルンダヨ、ト俺ハ手品ツカイノ様ニ一寸氣取ツテ、エイ、ホラ、トヤツテ見セタガ、オカシナ事ニ、コクンコクントブツカル計リデサツバリ乗ラナイ。小父チャン、ダ目ネ、ト御米サンガ笑ツタ。御米サンハ抱イテ居タ良坊ヲ左手ニ抱キ代エ、片手デ俺ノ手カラ日月ボールヲ取ルト、ヒョイトワケモ無ク皿ノ上ニ玉ヲ乗セタ。又落シタガ、又ヒョイト乗セタ。へー、器用ナ物ダナー、何時其ンナ事ケイコシナサツタ、ト俺ガオドロクト、何モコンナ物、ケイ古シナクツタツテ、ト御米サンハ少女ノ様ニカホヲ赤クシタ。良イ御カミサンダ、ト俺ハ心ノ中デ感タンシタ。別ビントユ一ノデハ無イガ丸ガホノ人好きノスルカホデ有ルシ、ドーシテ西口ハ御里サンノ様ナハスバナ女



ニカカリ合ツテ、コンナ良イ御カミサンニキモヲ焼カセルノダロート、俺ハ西口ノ氣持ガサツバリ計リカネタ。コノ頃、御里サンハ來マスカ、ト俺ハタツネテ見タ。近頃ハアマリ來マセン、ト御米サンハ答ヘタガ、急ニカホヲ雲ラセタノデ俺ハツマラヌ事ヲ言ツタト後カイシタ。シカシ、御米サンガ來ナイト言ツテカホヲ伏セタノハ、言ハナケレバ良イ時ニ御里サンノ事ヲ言ツタ事ヲ思ヒ出シテイヤナ氣持ニ成ツタノデハ無ク、御里サンガ近頃來ナタナツタトユ―其ノ事ガ何カ不安デ成ラヌ様子ニ見エタ。其レハ、御里サンガコチラニ出向イテ來ルノデアレバ、來テキル事ハイヤデ有ツテモ、來タ時ハタダ色ンナ物ヲ持ツテ來タリ、門口デ話ヲシテ歸ルダケダカラ別ニイヤナ必配モ無イワケダガ、御里サンガ來ナクナツタトユ―事ハ、コノ頃外出ヲスル事が多クナツタ西口ノ事ト照ラシ合セテ、外デハ何ヲシテキルカ判ラヌトユ―イ

ヤナ不安ガ有ツタワケダロー。其處デ俺ハ氣附イタノダガ、サツキ、西口ガ友枝サンノ所ニ行クト行ツテ朝早く出タノニ、今ダニ歸ラナイト言イナガラ、御米サンガ、妙ニニガイ様ナカホヲシタノハ、西口ガ友枝サンノ所ニカコツケテ、御里サント何處カデ合ツテキルノデハ無イダローカトユ―不安ガ有ツタノカモ知レヌ。其ンナイヤナ氣ヲ何時モ廻シテ居ナクテハ成ラヌトユ―事ハ何トユ―不ユカイナ事ダロー。

スルト、ウハサヲスレバ影トヤラ、トハ良ク言ツタ物ダ。ヒヨツコリ御里サンガアラワレタ。三本木ノ停留所デブーブトラツバノ鳴ル音ガシタノデ、フト何氣ナク其ノ方ヲフリ返ルト、黄色イバスカラ吐キ出サレタ人ノ中ニ四角ナ御里サンノカホが見エタ。遠クカラ俺達ヲ見ツケルト、御里サンハ一寸頭ヲ下ゲテホホエミ、下駄ノ音ヲカランカラントハズマセナガラ小走リニ近



ツイテ來タ。俺ハタツタ今御里サンノ事ヲ考エタリ話シタリシタ矢先キダツ  
タノデ、御里サンノ白イ顔ヲ見ルト胸ガドキトシタ。西口ノ御カミサン  
ノアカ抜ケノセヌ丸マゲニクラベ、御里サンハコレハ水モシタル様ナトモ  
言フベキ水々シイ丸マゲニユツテキタ。御里サンハ俺達ノ所マデ急ギ足デ來  
ルト、オメデト、トドチラニ共無ク言イ、常チヤンモ五ツニ成ツタネ、小  
母チヤンモオバーサンニナツタヨ、ホホホ、ト常坊ノ頭ヲナデ、ホレ、御年  
玉ダヨト言ツテスバヤク十錢玉ヲ紙ニツツンデ常坊ノ手ニニギラセ、良イ御  
年ヲ取ツタデシヨ、今日ハ家ニ御トソニ來タノヨ、ト又ドチラニ共無ク早口  
ニ言ツテ、俺達ニハ一ト事モ言ハセズ、カラシコロント行ツテシマツタ。俺  
達ハアツケニ取ラレタ様ニ御里サンノウシロ姿ヲ見送ツテ居タガ、御里サン  
ノ姿ハ二町ホド先ノ諸式屋ノ角ヲ右ニ曲ツテ見エナクナツタ。其ノ諸式屋カ

ラ又三町計リ先ニ御里サンノ實家ノラムネ屋ガ有ルノダ。俺ガ我ニ歸ツタ様  
ニ御米サンノ方ヲ見ルト、御里サンハキレイデスネ、ト言イ、御米サンハ何  
故カ急ニハシヤイダ調子デ、マー、門口ニ立ツテキナイデ御入ンナサイ、正  
月ノ御チソーハ數ノ子ニゴマメニ決マツテルケレド、酒ダケハ有リマスカラ、  
西口モ間モ無ク歸ツテ來マシヨ、ト、下駄ヲキチント上リガマチニヌイデ  
家ノ中ニ入ツタ。アリガト、一寸行ク所ガ有ルカラ、歸リニ寄リマス、ト、  
モ、奥ノ方ニ入ツテ見エナイ御カミサンニ聲ヲカケテ俺ハ町ノ方ニ出タ。

一月十日

風デトトト五日ホド寝コンデシマツタ。寒イ日ニ無理ヲシテ山芋ヲ取リ



ニ行ツタノガ良クナカツタノカモ知レヌ。モ一小使錢モ無クナツテキタシ、友枝サシカラモ正月ニ少シ大ゼイノ客ヲスルノデ五貫目ホドホシイトタノマレテキタノデ、寒サヲオシテ山ニ行ツタノダ。シカシ、コレ位ノ寒サヤ仕事デヘコタレル俺デハ無カツタノダガ、ドユー物カ今度ハヒドクコタエタ。熱ガアツテ頭ガワレル様ニイタイ上ニ、氣カン支ヲヤラレテ聲ガ全ク出ナイノダ。聲ノ出ンノニハ平口シタガ、西口ガ見マイニ來タ時ニオシエテクレタ方法デヤツテ見タラ、今日ハ少シ聲ガ出ル様ニナツタ。其レハ金カントホシ柿トヲ輪切リニシテ一シヨニ煮ツメテ其ノ汁ヲ飲ムノダ。コレハ妙藥ダカラ今度誰カ聲ノ出ヌ風ヲ引イタ者ガ有ツタラ宣傳ヲシテ進メテヤロー。其レニシテモ居ソーローヲシテ居テ病氣ニ成ルノハイヤナ物ダ。氣ノ毒デ仕様が無イノデ、廣公ヤ御カミサンハ何モ氣ガネハ入ラント言フガ、熱ガ下ツタラ明

日アタリカラ起キル事ニシヨ一。

御村サンガ御カユヲ作ツテマクラ元ニ持ツテ來テクレタ。御カミサンハ雪平ノ中ニ鹽ヲ落シテ、マゼナガラ、大サンモモ一良イカゲンデ、ゴージョ一ヲ止メテ御カミサンヲ貰ツテハドー、コンナ時ニハ何ボガンコナアンタデモ一人者ハ困ル事ヲサトルデシヨ一、ウチノ人モ何時カソー言ツテ居タシ、アタシモ氣ヲ附ケテオクカラ、良イ加ゲンノ人ガ有ツタラ貰ツテ、家ヲ持ツタ方ガ利口デスヨ、貧乏所帯デモ家持チノ苦勞トユー物モ又良イ物デスヨ、ト言ツタ。フトンノ中ニ腹バツタママ、俺ハ熱イ御カユヲフーフー吹イテススリナガラ、其ノ言葉ハ一タイ皮肉デアローカ、ノロケデアローカト思ツテ、御カミサンノシヅ柿色ノソバカスノ有ル顔ヲ見上ゲタ。ウチノ人見タイナヤボトハ違ツテ、アンタナラ何ボデモ來手ガ有リマスヨ、ト御カミサンガ又言



フノヲ、又モ皮肉デアローカ、ノロケデアローカト思ヒナガラ、ヘー、アリ  
ガトー、シカシ、アタシハモー女ハマツ平デスヨ、ト俺ハ言ツタ。オカシナ  
人デスネ、ト御村サンハコノ年ニナルマデ女ノ味ヲ知ラヌ事ヲ哀レム様ニ笑  
ツタガ、フト何カ氣附イテビツクリシタ様ニ、ヤツバリ、ト俺ノ顔ヲ見テ妙  
ニゲンシユクナ顔ヲシタ。俺ハドーシタワケダロト思ツテ、初メハコツチ  
ガオドロイタガ、スグニ其ノ事ニ思イ至リ、イヤ、其ンナンヂヤー無イデス  
ヨ、ト笑ツテ言ツタ。實ハ俺ニ附イテハ一ツノ傳説ガ有ル。其レハ俺ガコノ  
年ニ成ル迄一人暮シテ女房ヲ持タヌトユ一事ハ當リ前デハ無イト言フノダ。  
俺ハ別ニ生理的ニ不具者デハ無イ。其ノ俺ガ今マデ何人カノ友達ガ妻タイヲ  
進メタニモカカハラズ、絶對ニコレヲ受ケ附ケズ獨身ヲ通スト言フ事ハ、普  
通デハ考エラレナイト言フワケダ。其處デ俺ハツマリ昔惚レ合ツタ女ガ有ツ

テ、何カノ拍子デーショニ成ル事ノ出来ナカツタタメ、其ノ女ニ義理立テヲ  
シテキルニ違イ無イトユ一事ニ成ツタ。其ノ女ガ死ンダカアルヒハ生キテ居  
テ生木ヲサカレタ様ニ別々ニ成ツテキルガ何時カ思イヲトゲル日ヲ待ツテキ  
ルノカ、ドチラカ判ラナイガ、ソ一ユ一事デ有ルニ違イ無イトミンナデ決メ  
テシマツタ。其ンナンデハ無イトイクラ言ツテモ、西口ヲ初メ友達ハニヤニ  
ヤ笑ツテ俺ノ言フ事ヲホントニシナイ。成ルホド俺ハ何時カ俺ガ若イ時ニ思  
ツタ事ノ有ル女ノ事ヲ話シタ事ハ有ル。其ノ女モ俺ノ事ヲ思ツテ居テ夫婦ヤ  
クソクシタ事モ有ル。然シ其レハモー三十年モ前ノ事ダ。其ノ女ハ今ハドー  
シテキルカ皆目知ラヌ。其ノ女ニ一主義理ヲ立テルホド俺ハシチコタラシイ  
氣持ハ無イ。所ガ友人共ハミンナソ一決メテキルノダ。コノ様ナ美シイ傳説  
ノ主人公ト成ル資格ハ俺ニハ無イノダ。コ一ユ一事ヲ廣公ノ御カミサンモ聞



イテ居タ物ト見エル。御村サンハ、ヤツバリ、ト言ツタ切リデ、モ一物モ言  
ヘナクナツタ様ニオゴソカナ表情ヲシテ俺ヲ見ツメタ。俺ハ困ツタガ、シカ  
シ、俺ノ方モ又何カ御カミサンヲ見ナホス様ナ思イデ有ツタ。何十年モノ間  
一人ノ女ヲ思イツメルトユ一事ニ對シテ、コノキンキン聲ヲ立テル別ニ何處  
ト言ツテ取り所モ無イ愚ドンニ近イ女ガ、ソ一ユ一事ヲ近ヨリガタイホド美  
シイ事デ有ルト感ジルトユ一事ニ對シテ、俺ニモオドロキノ氣持ガ有ツタ。  
其シテ、ソ一ユ一事ヲ美シイト感ジテオドロク御村サンコソマコトニ美シイ  
ト思ツタ。

一月十八日

梅ガ咲イタ。白イ花ト計リ思ツテキタノニ紅梅ダツタ。イヨイヨ八十錢デ  
買ツテ來タノガ安イ。マダツボミガ有ルカラ散ツテシマフマデニハ日ニチガ  
有ル。日當リノ良イ窓ギワニ出シテアカズ眺メタ。

一月十九日

組合カラ一寸用件ガ有ルカラ來テクレト言フ言附ケガ有ツタノデ、今頃何  
ダロト思イナガラ久シ振リデ濱ニ出タ。濱ニ出ルト知ツタカホガ澤山有ツ  
テ、ヤ一珍シイナー、ドーシトルカナ、ト何人モガ聲ヲカケタ。組合ノ事ム  
所ニ行クト、組合ノ人ハ居ナカツタガ、カホ見知リノボーシンガ火鉢ヲマタ  
倉ニハサンデ新聞ヲ讀ンデ居タ。組合ノ人ハ、ト聞クト、ヤ一鈴木君カ、波



多サンハ今一寸炭商組合マデ行ツタガ、ア、ソ、ソ、君ノ事ハ聞イテ居  
タ、何デモ波多サンガ骨折ツテ、君ノ甲種鑑札ヲ下ゲテ貰フ事ニ成ツタソ  
ダ、ト其ノボーシンハ言ツタ。ソ、カ、何ノ事カト思ツテ來タラ、沖仲仕ノ  
鑑札ノ事カ、其ンナラ濟マヌケレドモ、モ、イ、マ、センカラト言ツトイテ下  
サイ、ト俺ハ言ツテ事ム所ヲ出タ。俺ハ後ニナツテ、組合ノ人ガタイソ、怒  
ツテキタトユ、事ヲ聞イタ。

辨才天神社ノ角ノ赤イポストニモタレテ、柳助ガ六尺ヲ持ツテ立ツテキタ。  
久シブリニ合フト馬鹿ニ成ツタ様ニ見エタ。コノ男モ長イ仲仕ダガ、  
仲仕ノ古手ハドーニモ成ラヌノカ、モ、六、六、近カローガ時々ハ矢ツバリ六  
尺ヲモト手ニ濱ニ出テキルト見エル。俺ハ柳助ヲサソツテ當リ矢トユ、ウ、ド  
ン屋ニ入ツタ。暗イ店ノ中デ俺達ハ狐ソ、バ、バ、一、バ、イツツト、二合ピンヲ一本

アケタ。柳助ハ二年前ニ家内ガ死ンデカラ一ペンニフケタ様ニ思ハレタガ、  
息子ガ二人トモ鐵道ニ出テキルノデ食フニハ困ラヌケレドモ、何時モ息子カ  
ラ小使ヲ貰ツテ計リ居ルノモ氣ガネナノデ、時ニハ煙草錢モ一ケニ濱ニ出テ  
キルノダト言ツタ。其レカラ、狐ソ、バ、バ、カ、キ、コ、ミ、ナ、ガ、ラ、ソ、バ、ノ、赤、イ、ノ、ガ、更  
品ソ、バ、デ、青、イ、ノ、ガ、ヤ、ブ、ソ、バ、ダ、ナ、ド、ト、物、知、リ、ガ、ホ、ニ、言、ツ、テ、キ、タ、柳、助、ハ、俺  
ガ山芋ホリヲヤツテキルト言フト、ソ、カ、其レデハ今頃ハ芋ノツルガ枯レ  
テキルダローカラ掘ルノニ骨ガ折レルダロート言ツタ。俺ガ笑ツテ、所ガチ  
ツトモ困ラナイト言フト、其ンナハツハ無イ、今頃素人ニ山芋ガ取レルハツ  
ハ無イ、ト信用シナイ風デ、ワシガ良イ事ヲオシエテヤルト言イナガラ、コ  
ンナ話ヲシタ。今頃山芋ヲ取ルツモリダツタラ、秋ノ終リ頃ニ麥ヲ二升ホド  
持ツテ山ニ行ク。其ノ頃ニハマダ芋ノツルモ出テキルカラ、其ノツルノ所ニ



麥ヲ四五ツブツマイテオク。冬ニ成ツテ芋ノツルガ枯レテ見エナクナツテ  
モ、麥ハ寒ニ向イテ芽ヲ出スノデ、一尺位ニノビル。其レヲ目印ニシテ行ケ  
バドンナ冬デモ困ル事ハ無イ。麥ノ有ル所ヲ掘レバ山芋ガ有ルワケダ。其ン  
ナ話ヲシタ後デ、柳助ハ、モ一五六月ニ成レバ芽ガ代ルノデ味ガ落チル、來  
年掘ル時ニハゼヒソーシナサイト言ツタ。俺ハ其ンナツマラヌ事ヲシナクト  
モ良イト思ツタガ、折角ノ年ヨリノ親切ニサカラツテモ仕樣ガ無イト思ツテ、  
ア、ヤツテ見ヨ、ト答ヘタ。シカシ、ソー答ヘタアトデ、其ンナ話ヲシ  
タ柳助モ俺ガ一年先ニモマダ山芋掘リヲヤツテキル様ニ考エテ居リ、其ンナ  
コソクナ手段ヲコージナクトモ何時デモ困ラナイト思ツタ俺モ、俺ガ來年モ  
山芋掘リヲシテキルダロト思ツテキル様ナノハ一寸オカシカツタ。俺ガ來  
年モ又山芋掘リヲスルトユ一事ハ、其ノ時ニ成レバ又スルカモ知レナイガ、

今カラ其レヲ豫定スルトユ一事ハ、何カ、フニ落ちナカツタノダ。

一月二十二日

廣公ハ今日ハ夜ノ出番ダ。日ガ暮レルト、御カミサンハ國防婦人會ノ講演  
會ガ有ルトカデ赤ン坊ヲ負ブツテ出テ行ツタ。俺ハルス番ダ。コノ間西口ガ  
カシテクレタ革新黨ノ黨首ノ書イタ本ヲ讀ンデキルト、西口ノ御カミサンガ  
來タ。御米サンハ良坊ヲ負ブツテ來テ、オミヤゲダト言ツテ帆柱羊カンヲ持  
ツテ來タ。何カ用デモ有ツタノデスカ、トキクト、イエ直グコノ先マデ來タ  
モノデスカラ、居ツテカドーカ知ラント思ツテ寄ツテ見タノデス、ト言ツタ。  
俺ガ出シタ番茶ヲノンデキタ御米サンハ、アラ、茶柱ガ立ツテキル、何カ良



イ事ガアルノカ知ラント笑ツタ。其レカラ、實ハアンタニ聞イタラ判ルト思ツテキルノデスガ、コノ頃西口ガ毎日ノ様ニ家ヲアケルノデス、何カ政治ノ集マリガ有ルラシーノダケレド、アタシニハクワシー話ヲシナイノデ何モ判ラナイ、其ノ政治ノ集マリトユーノハ其ンナニ毎日毎晩ホントニ有ツテキルノデシヨーカー、ト思イツメタ様子デ言ツタ。其レハキツト大日本革新黨ノ集會デシヨーカー、今度其ノ黨ノ支部ヲココニ作ルノデ、其ノタメニ忙シイノデシヨーカー、僕モ其ノ會ニ入ルヨーカーニ進メラレテキルノダガ、トモ角、タシカニ今ガ一番忙シイ時ニ違イナイ、コトニ西口君ハ幹部ダカラ外ノ者ヨリモヨケイ忙シイニ違イナイ、其レハ決シテアナタガウタガツテキル様ニ、黨ノ集會ニカコツケテ御里サンニ合ツタリシテキルワケデハ絶対ニ無イデス、其レハ僕ガ保證シマス、ト俺ハ言ツタ。其ンナラ良イノデスケレド、ト御米サンハ尙

モ曇ツタカホノ表情ヲトカナカツタガ、其レデモ俺ガキツバリト斷言シタノデイクラカ安心シタ様子デアツタ。スルト、下シテネカシテキタ良坊ガ急ニ泣キ出シタノデ御米サンハ抱キ上ゲ、モト三ツニモ成ツタノニマダコノ子ハ乳ヲ止メンノデスヨ、ト言イワケヲスル様ニ言ツテ、胸ヲハダケテ乳ヲフクマセタ。俺ハ何氣ナシニ見タ御米サンノ乳房ガ、シナビタ大根ノ様ニシヲタレテキルノヲ見テ、イタイタシイ氣持ニウタレタ。良坊ガグツグツト勢良ク乳ヲスツテキルノヲマンゾクソーニ見テキル御米サンノカホヲ見テキルウチニ、俺ハワケノワカラヌハゲシイイキドーリノ様ナ氣持ガ胸ノ中ニワイテ來タ。



一月二十六日

コノ町デ出来タ戦死者ノ第何回目カノ合同葬ガ濱デ行ハレタノデ俺ハ行ツタ。マツ青ナ空デ天氣ハ良カツタガ、風ガ切ル様ニ冷タカツタ。濱ノ埋立ニ會場ガ作ラレ、ダンガモーケラレテ、花輪ヤ、色々ナ御供物ガキレイニ列ベラレテ有ツタ。戦死者ノ名前ヲ書イタ白イ旗ガ何本モ風ニヒラメイテキタ。白イ風ロシキニ包マレタ兵隊サンノ遺骨ガ、黒イ物ヅクメノ喪姿ノ家族ノ人ノ胸ニ抱カレテ運バレテ來ルノヲ見タダケデ、俺ハモー胸ガ一バイニナツタ。他人ノ俺デサヘコンナ氣持デ有ルカラ、死ンダ兵隊サンノ家族ノ人、父、母、妻、子、キョーダイノ胸ノ中ハドンナダロー。兵隊サン、アリガトー。俺ハ心ノ中デ何度モクリ返シタ。戦死シタ兵隊サンノ子供デアローカ。三ツ位ノ女ノ子ガ、大ゼイノ人ガ居タリ、キレイイナ花輪ヤ旗ガ有ルノデウレシイノダロ

74

ー。ニコニコ笑イナガラトビ歩イテキタ。祭ダンノ方ニ行クノデ母ノ様ナ人が、コレコレト言イナガラ連レモドシタ。黒イ着物デボツクリ下駄ヲハイタ其ノ可愛イイ女ノ子ハ、ナホモデツトセズ今度ハ何か片言ノ唄ヲ唄イ出シタ。無論、父ノ死ンダ事ヲ知ラナイノダロー。俺ハスグニ廣公ノ御カミサンノ事ヲ思イ出シタ。其シテ廣公ガ無事デ歸ツタ事ガドンナニ良イ事デ有ツタカトユー事ヲ今更ノ様ニサトツタ。

一月二十七日

廣公ガ今ノ職場ヲ止メルツモリダト急ニ言イ出シタノデオドロイタ。棧橋仲仕ノ仕事ハ仲仕ノ仕事ノ中デハ王デ、希望者ハ非常ニ多イノニカカワラズ、

75



誰デモガタ安クハ入レ無イ物デ有ルダケニ、廣公ガ止メルトユ一事が初メハ  
フニ落チナカツタ。シカシ、コノ事ハ廣公ガ突然考エ出シタ事デモ無ク、又、  
別ニ職場デ落ち度ガ有ツタワケデモ無イラシク、廣公ノ話ヲ聞イテ居ルウチ  
ニ、俺ニモハツキリト了解ガ行ツタノデ、ソーカ、其ンナラ止メルガ良カロ  
ト言ツタ。大タイガ無口ダツタ廣公ハ戦争カラ歸ツテカラ一層無口ニ成ツ  
テ、フダン何カガ有ツテモホトンドナツトクノ行クヨ一ニ話サ無カツタ。其  
處デ俺モ廣公ガ棧橋ヲ止メルナドトユ一事が最初ハ一寸思イガケモ無イ事ノ  
様ニ思ハレタノダ。

廣公ハ別ニ仕事ガイヤニ成ツタノデモ無ク、タダ腹ガ立ツテヤル氣ニ成ラ  
ナイト言フノダ。今、棧橋仲仕ノ間デハ賃銀問題ガ持チ上ツテキル。コレハ  
外ノ職場デモ起ツテキル様ニ、其ノ原因トユ一ノガ、物價ガ上ツタカラトカ

トユ一様ナ一般的ナ事デハ無ク、棧橋ニ特有ナ理由デ一寸オモムキヲ異ニシ  
テキル。棧橋仲仕ハ、石炭ヲ滿サイシタ炭車ガ棧橋ニ上ツテ來レバ、其ノ炭  
車ノ底ヲ切ツテ、石炭ヲ出シ、棧橋カラ舟ニ通ジテキルジョー戸ノ中ヲ流シ  
テ船ニ積ミコムノガ仕事ナノダガ、又、今トテモ其ノ仕事ニ變リハ無イガ、  
其ノ石炭ガ問題ナノダ。以前ハ炭車ノ底ヲ切レバ、バタント底ガ開キ、同時  
ニ、クワートユ一様ナ氣持ノ良イ音ヲ立テテ石炭ガアフレ出シ、黒イ水ノ様  
ニジョー戸ノ中ヲ抜ケテ舟ノ中ニ流レコンダ物ダガ、コノ頃デハ、炭車ノ底  
ヲ切ツテモ石炭ガ出テ來ナイトユ一ノダ。底ヲ切ツテモ、バタント鐵板ノ底  
ハ開ク音ハシテモ、其ノアトニ、クワートアフレ出ス石炭ノ音ガシナイ。石  
炭ガ入ツテ居ナイワケデハ無イ。一バイ入ツテキルノガ出テ來ナイノダ。其  
レハ石炭ガアメノ様ニネバリツイテ、マルデ炭車ノ中全タイガ一トカタマリ



ノ石炭ノ様ニナツテキルカラダ。其處デ底ヲ切ツタ上ニ又スコツブデ叩キコ  
ワシテ、カグリ出サナケレバ石炭ガ出ナイ。以前ハ十五トン炭車デ五分モカ  
カラズニ流レ出シタ石炭ガ、今頃ハ二十分モ、三十分モ一ト炭車ニカカル様  
ナ事ガ有ル。石炭ニスフガ入ツテキルカラダ。山ヲ出ル時ニハ炭車ノ上ノフ  
チヲコエル位ニ積マレテキル石炭ガ、港ノ棧橋マデ來ル間ニ、ユサブルノデ  
次第ニカタマツテ下ツテシマフソダ。其ンナノガ無論全部デハ無イガ、中  
ニ有ル。今マデボタトシテ捨テラレタ物が羽ガハエテトブノダカラ、其ンナ  
事ハ當リ前ノ事ダ。コノ頃出ル石炭ハロクナ物が無イ。惡イ物デモモエレバ  
良イガ全然モエナイ石炭ガドンドン出ル。其レラノ石炭ハホトンド全部仲仕  
ノ手ヲ通ツテ行クノデ、仲仕ニハ良ク判ル。石炭ガ惡ク成ツタ爲ニ棧橋仲仕  
ノ手間ガ三倍ニモ五倍ニモ成ツタノダ。其レデ無クテサヘ物價トーキノ爲ニ

賃銀値上ゲガ無ケレバヤツテ行ケナイ仲仕ガ、同ジ仕事ニ對シテ以前ノ何倍  
モノ勞力ヲ使ハネバナラヌト成レバ、賃銀問題ガ起ルノガ當然ダ。所ガ其ノ  
賃銀トユーノハ、去年ノ九・一八デストツブヲサレテキルノデ、荷主ノ方ハ  
其レヲタテニ取ツテテンデ相手ニシナイ。棧橋仲仕ハ、荷主ノ方ハ石デモ泥  
デモ石炭トシテ馬鹿ナ値ダンデ賣リ出シテ大モ一ケヲシテオキナガラ、ワヅ  
カナ賃錢上ゲノ希望ニ對シテモ、ケンモホロロノアイサツダトユーノデ大イ  
ニフンガイヲシテ居ル。ユーユー時ニ、廣公ノ氣持ハミンナト同ジ氣持ノ外  
ニ、又全然別ナ物ガアツタ。其レハ歸カン兵トシテノ抑エル事ノ出來ナイフ  
ンマンノ情デ有ツタ。自分モ一年半ノ間戰地デ苦勞ヲシテ來タ。幸イ、命ダ  
ケハ持ツテ歸ツタガ、戰地デノ兵隊ノ苦勞トユー物ハ、口ヤ筆デドンナニシ  
タ所デアラハス事ガ出來ナイ位ヒドイ物ダ。言ツテモ判ラナイノデ自分ハ歸



ツテカラモ戦争ノ話ハアマリシナカツタ。兵隊ハ無論國ノ爲メニ何ノ心オキ  
モ無ク戦ツタ。苦勞ヲ苦勞トモ思ハズ、ドンナ苦勞ニモタエタ。其レモ皆國  
民ノ爲メダツタノダ。兵隊ノギセイニ依ツテ祖國ガリツバナ歩ミヲツケテ  
居ル事ハ苦勞シテ來タ兵隊ニ取ツテハウレシイ。シカシ、歸ツテ來テ見ルト、  
ドーモ、何カトフニ落ちヌ事ガ多イ。廣公ハ俺ト同ジ様ニ教育ガ無イノデ、  
何ガドー、フニ落ちヌカ考エテモ判ラナイ。シカシ、直セツノ自分ノ戰場デ  
有ル棧橋デ、毎日見セツケラレル石炭ノインチキニハ、ドーニモモ我マン  
ガ仕切レ無クナツタ。其レハ賃銀ガ安イトカ高イトカユ一事デハ無イ。賃銀  
ハ或イハ上ルダロー。シカシ、其レハ五倍ニナツテモ十倍ニ成ツテモ、廣公  
ニ取ツテハ同ジ事ダ。毎日職場デ味フコノ苦々シサヲ教育ノ無イ廣公ハドー  
ユ一形デ誰ニウツタヘタラ良イ物カ、サツバリ判ラナイ。其ノ上、モー一ツ

廣公ガタマラ無ク成ツタノハカラダノ自由ガ全ク無イ事ダ。在ゴ一軍人デ有  
ル廣公ハ、コノ町カラ今ナホ引ツキリ無ク出征シテ行ク人達ヲ送ツタリ、無  
言ノガイセンヲシテ來ル遺骨ヲ出迎ヘタリシタイノダ。出テ行ク兵隊ニ取ツ  
テ、一人デモ多クノ人ガ來テ送ツテクレルトユ一事が、ドンナニウレシイ物  
デ有ルカ、自分ガ兵隊デ有ツタ廣公ニハ良ク判ル。遺骨ガ歸ル時ニハ、町ノ  
人全部ガ迎エテヤラナケレバウソダ。シカシ、ソー思イナガラ自分ハ出テ行  
ク事が出來ナイ。何時モ出ラレナイワケデハ無イガ、ソーユ一事ノ爲メニ一  
二度仕事ヲ休ンダ所ガ、ドーモ出事ガ多イ、ト言ツテ機ゲンガ悪イ。其ノ爲  
ニト一ト一昨日ノ合同慰レイ祭ニモ行ク事が出來ナカツタ。コーユ一風ナワ  
ケデ、廣公ハ、モー石炭ノカンケイノ仕事ハイヤニ成ツタノダ。少シ飲ンダ  
酒ノセイモ有ツタローガ、何時モ無口ナ廣公ハ俺ガオドロイタホドユ一ベン



ニナツテ、演説ノ様ニコノ様ナ事ヲ俺ニ語ツタ。其ノ後デ、又、コノ事ヲ俺ニ話シタ所デ仕方ガ無カツタト氣附イタ様ニ、フツトダマツテシマツタ。廣公ノ目ニ涙ガキラキラ光ツテキタ。

廣公ハ前カラコノ事ヲ考エテ居タラシク、モ一新シイ就職口ヲ見ツケテ有ルノダト言ツタ。其レハ或ル運送屋ノカントク見タ様ナ仕事デ有ツタ。收入ハ棧橋仲仕ヨリズツト落ちルガ、氣分ダケデモ良イダロー、ト、廣公ハハレバレシタカホニ成リ、所デモ一ツ手マワシ良ク其ノ運送屋ノ近クニ小サイ家ヲ見ツケテオイタ、ココヨリ小サイガ、收入モヘルシ、又、店ニ近クナイト不便デモ有ルシ、其ノ上、ココノ家主ノ宇土モウルサイノデ、イヨイヨミコシヲ上ゲル事ニシタ、宇土ハコノ頃人夫ヲダイブ入レテキルガ、ミンナコノ長屋ノドレカニ詰メコンデキルラシー、俺ガ歸カン兵ダトユーノデ面ト

向ツテハ何モ言ハナイガ、何トカ出テクレレバ良イト思ツテキル事ハ必デヨ一ダ、其レデ俺ニドロボーノケンギヲカケテ見タリシテ、イヤガラセヲスルノダ、ローブドロボーハツカマツタラシーガ、イズレニシロ、邪マニサレテキルノニ住ンデ居ルノモ居心地ガ悪イ、コチラモ何モ歸カン兵ダカラト言ツテ高ブツテキルワケチャ一無い、シカシ、俺ガガン張ツテキルトソ一取ラレソ一ダカラ出タガマシダロー、コノ家ハコノ長屋デニ番目ニ廣イノダカラ、朝鮮人ノ仲仕デモオケバ、十人ハ入レラレルダロー、所デ氣ノ毒ナノハ、大サン、アンタダガ、ト廣公ガ言イカケタノデ、俺ハ、何ノ、其ンナ心配ガイルモノカ、色々トホントニ長イ事オ世話ニ成ツタガ、俺トテモコノ間カラ考エテ居タコトデアルシ、西口モ來イト言ツテクレテキルカラ、俺ノ方ハ今夜カラデモ宿ガアルヨ、ト言ツタ。



二月一日

祕ゾーノ鶏ヲシメタカラ來ナイカト言ツテ來タノデ、西口ノ所ニヒル飯ヲヨ  
バレニ行ツタ。仕事場ニハ五尺位ノ地藏尊ガ彫リカケノママスエテ有ツタ。  
鬼ヤ、狸ヤ、龍ノ面ナドガカンナクツニ埋モレテコロガツテキタ。友枝サン  
ノ所ノ龍ノラン間ハ心カラ身ヲ入レテ仕事シタガ、コノ地藏ハドーモ氣乘リ  
ガシナイノデ弱ツテキルト西口ハ言ツタ。

久シプリノスキ焼キダツタ。貰ツタノダト言ツテ西口ハビールヲ抜イタ。

七リンノ火ハ景氣ヨクオコツタ。グツグツト良イニホイヲサセテカシワガ煮  
エタ。マツ青ナ大キナネギノニホヒモ良カツタ。正月カラズツト丸マゲヲク

ヅサナイ御カミサンガ、イツイソト世話ヲ焼イタ。カシワノスキ焼キハ今年  
初メテナノデ、俺ハ少シ氣ガサス位、ムシヤムシヤト食ベタ。自分デーベン  
モハシヲオカナイノニ氣ヅイテ、誰モ何トモ言ハナイノニアワテテハシヲオ  
イタ位ダ。自分ナガラオカシクテ吹キ出シテシマツタ。コーシテ俺達ガサカ  
ンニヤツテ居ルト、表デクツノ音ガシテ、警察ノ人が來タ。背廣ヲ着タカホ  
見知リノ高等ノ人デアツタ。ヤー、ヤツトルナー、ト笑ツテ、西口君、一寸、  
ト言ツタ。西口ハ表ニ出タ。何かボソボソ話シテ居タガ、西口ハスグニ引キ  
返シテ來タ。表ヲ入りナガラ西口ハ、ドーデスカ、ツキ合ハンデスカ、ト言  
ツタガ、アリガトー、忙シイカラ、ト其ノ警察ノ人ハ言ツテ、ギユツギユツ  
トクツノ音ヲサセテ歸ツテ行ツタ。何ダ、ト聞クト、何、コノ間カラ支部ノ  
發會式ノ事デ問ヒ合ハセテ有ツタノヲ、ワザワザ知ラセテクレタノダ、ト言



ツテ、サー、ツゴ、ト西口ハビールヲカカエタ。スルト、ソバニ居タ御米  
サンガ急ニハジケタ様ニ笑イ出シタノデ俺達ハビツクリシタ。ドーシタノダ、  
ト聞イテモ、御米サンハドーニモ我マンノ出来ヌ様ニ笑ツテ計リ居テ返事ヲ  
シナカツタ。笑イノ間ニ、コノ子ガ、ト常坊ヲ指サスガ、又、タマラヌ様ニ  
笑イ出ス。常坊、ドーカシタノカ、ト俺ハキイテ見タ。常坊ハ照レテ何ニモ  
答ヘズ御カミサンノ後ニカクレテシマツタ。ヤツト笑イ止ンダ御米サンハ、  
マダ笑イヲフクンダ聲デ、ネー、コノ子ガネ、今ネ、巡查サンガ來タノハ、  
今日ハ興亞奉公日ナノニ、一ジュー一サイニシナイデ、オ父ツチヤン達ガス  
キ焼キヲシテキルカラオコリニ來タンダローツテ、ト、ソー言ツテ、又腹ヲ  
オサヘテ笑イ出シタ。俺達モ笑イ出シタ。成ルホド、ソーカ、ト、シバラク  
シテ西口ガ感心シタ様ニ、一ジュー一サイカ、俺達ハ何時モ一ジュー一サイ

ダ、一ジューモ無イ、一サイダケダ、トソー言ツテ又大キナ口ヲ開ケテ笑ツ  
タ。

二月二日

大日本革新黨ニ入黨スル事ニシタ。廣公モ入ルトユーノデ西口ニ頼ンデ手  
續ヲシテ貰ツタ。革新黨ノ指ドー原理ヤ、方針モマダハツキリシナイガ、入  
ツテカラ研究スルツモリデ有ル。何か、トモ角、世ノ中ノ状態ガ今ノママデ  
有ツテ良イハツハ無イ。ドーシタラ良イカ俺ニハ判ランガ、何トカ成ラナク  
テハイカヌト言フ事ハ歴然タル物ダ。何か新シイ時代ガ來ナクテハ成ラヌ。  
ソーユー物ニ對シテ漠然トデハ有ルガ革新黨ハ方向ヲ持ツテ居ル様ナ氣ガス



ル。マー、研究シテ見ヨ。思ハシク無カツタラ出ルマデダ。革新黨ニハ歸カン兵ガダイブ入ツテキルト言フ事ダ。何カ參考ニナル事ガ聞カレルカモ知レナイ。

二月四日

御米サンガ子供ヲ連レテ、實家ニ歸ツタトユノデ連レモドシニ行ツタ。世話ノ焼ケル事ダ。御米サンノ實家ハ二里計リ奥ノ田舎ダ。玉島デバスヲ下リテ香木川ニソテ又七八町ホド歩カネバ成ラヌ。久シ振リデコノヘンニ來タガ新シイ家ガ立チ列ビ、見チガエル様ニ開ケテキタ。御米サンノ實家ハ俺ノ想像トチガツテ意外ニ大キナ農家デ有ツタノデオドロイタ。高い生ケ垣デ

張リメグラサレ、カブラ木門ヲ入ルト兩側ニウツソトシタ竹林ガ有ツタ。コンナリツバナ家カラ嫁入リシテ來タ御米サンガ、ヨクモ西口ノ所ニシンボ一シタ物ダト俺ハ感心シタ。俺ハ一ツニ西口ガヨロシク無イト思ツタ。石ダタミノ上ヲキタナイ破レ下駄デ歩イテ行クト、庭デアソソンデキタ常坊ガ俺ヲ見ツケテ、ヤー、大助小父チャンガ來タ、ト叫ンデ俺ニトビ附イテ來タ。常坊ハ俺ノコシニシガミ附キ、歸ツタライヤダヨ、歸ツタライヤダヨ、トモ一泣キ聲ニナツテ言ツタ。ヘンビナ田舎ノ家ガヨツボドサビシカツタ物ダロ。何、小父チャンハ今來タ計リダ、歸リハセンヨ、ト言ツテ俺モ常坊ヲカカエ上ゲタ。

御米サンハ居ナカツタガ、御母サントユ、ガンコソ一ナオ婆サント話シテキルト、良坊ヲ負ブツテ御米サンガ歸ツテ來タ。丸マゲハクズシテ東髪ニ



シテ居タ。俺ヲ見ルト、意外ニハレヤカナカホデ、イロイロアナタニ計リ御心配ヲカケマスネ、ト言ツタ。

ソレカラ色々ト話ヲシタ。一日ニスキ焼キヲシタ時ニハアンナニ何ノクツタクモ無サソ一ダツタ御米サンガ、アレカラ三日モタヌノニ、ドーシテ實家ニ歸ヘツタノカ、俺ハワケガ判ラナカツタノダガ、御米サンノ話デ初メテ了解シタ。御米サンガ昨日町ニ出タ所ガ、榮町ノ角デ、西口ト御里サンガ二人デ立チ話ヲシテキルノヲ見タ。ハツトシタ御米サンハ町角ニカクレテ見テキルト、二人ハ何カ面白ソーニ笑ツテカラ、別レタ。丁度其處ニ來タバスニ西口ハ乗ツタ。御米サンハ御里サンニ近ヅイテ、一寸話シタイ事ガ有ルカラト言ツテ、人通りノ無イ松源寺ノヨコニ一シヨニ行ツタ。其レカラ思ヒツメタ様子デ思イ切ツテ、今何ヲ話シテ居タノカトタヅネタ。スルト御里サンハ、

今度アイビキスル時ト場所トヲ打チ合ハセタノダト言ツタ。其レカラ、御米サンガゴン願スル様ニ、西口ヲユーワクシナイデ下サイ、ト言フト、御里サンハ、ユーワクサレタノハアタシノ方ヨ、甚吉サンハモ一アタシノ物ダカラ、ト言ツテ、ケタタマシク笑イナガラ行ツテシマツタ。御米サンハ世界ガマツクラニ成ツタ様ナ氣持デ、自分ノカラダモ中ニウク様ニ思イナガラ家ニ歸ツテ來タ。モ一歸ツテキタ西口ニ、アンタハ今サツキ榮町ノ角デ御里サント何ヲ話シテキタノト聞クト、西口ハ御里サンニ合ハナイト言ツタ。自分が見タト言フト、ソーカ、其ンナラ仕方が無い、ト笑ツテ、今度御里サンガ鈴川トユーオデン家ニツトメル様ニ成ツタカラ出テ御出デト言ツタカラ、景氣ガ悪クテ夜ノ町ニ出ル勢モ無イト言ツタノダ、ト答ヘタ。其ノ事ガアンナニウレシソーニ笑フ事ナノ、ト言フト、アー、アレハ町ノ角デ犬ト猫トガケンカヲ



シテ犬ノ方ガ猫ニ負ケタノデ笑ツタノダ、ト言ツタ。御米サンハ直グニ其處ニ居タ常坊ノ手ヲ引キ、良坊ヲ抱イテ表ニ出、丁度來タバスニ乗ツテ實家ニ歸ツタ。ソーユー話ダツタ。御米サンハ、西口ニ御里サンヲ御嫁ニスル様ニソー言ツテ下サイ、ト言ツテ、泣キ出シタ良坊ニ乳ヲノマセタ。

御母サンガ中々六ツカシソーナ人ダツタ。シカシ、一タンヤツタ物デ有ルシ、シカモモー二人モ子供ノ有ルモノガドンナ事ガ有ツタカ知ランガ、トビ出シテ來ルナドハ米モ米ダト言ツタ。結局、西口ガ絶對ニ御里ト手ヲ切ルトユー證文ヲ書イテ持ツテクレバ歸ソートユー事ニ成ツタ。トモ角自分ト一シヨニ歸ツテクレバ、自分ガ受ケ合フカラト極力言ツテ見タガ、御母サンガガントシテ聞キ入レナカツタ。仕樣ガナイノデ俺ハ一ト先ヅ手ブラデ歸ル事ニシタ。

西口ニコノ事ヲ話スト、西口ハシバラクダマツテ居タガ、女ニハカナハンナ、仕方ガナイ、證文ヲ書コト言ツタ。西口ガ、スズリヲ持ツテ來テ、青イケイ紙ニ證文ヲ書キ初メタノデ、俺ハ、オ前モ少シ考ヘネバイカンヨ、證文ダケデハ何ニモナラヌ、ホントーニ御里サント手ヲ切ツテクレ、俺ガタノム、ト言ツタ。スルト、證文ヲ書キカケテキタ西口ハ途中デ筆ヲオイテ、俺ノカホヲ見ツメタ。ニランダトユー方ガホントーダロー。西口ハ黄色イ上齒ヲ出シテ下口ビルヲイライラトカンダ。鈴木、今言ツタノハ本氣カ、ト西口ハ大キナ聲デドナツタ。俺ハビツクリシタガ、本氣ダ、ト答ヘタ。スルト、オドロイタ事ニ、西口ハガツクリト首ヲタレタガ、西口ノ目カラハラハラト大キナ涙ガ落チタ。シバラクソーシテキタガ、ヤガテカホヲ上ゲテ、一語一語切ル様ニ言ツタ。女ニハ男ノ氣持ハ判ラン、ソレハ仕樣ガナイ、御米ハ良



イ女房ダ、外ニ何モユ一事ハナイガ、ヤキモチ焼キノ所ガ一ツ欠點ダ、俺ハ御里サントハ何ノカンケイモ無い、絶對ニ無い、ダカラ、手ヲ切レモ、足ヲ切レモ、其ンナ事ハスル必要ガ無い、俺ハ革新黨ノ事ニカヲソソイダ、其ノ爲ニ毎日ノ様ニ外出モシタ、御米ガソレヲドー思ハウガ、女房ニ氣ガネシテ大切ナ男ノ道ヲ捨テル事ハ出来ヌ、男ノ仕事ヲ一々女房ニベン解スル必要モ無い事ダ、俺ハ自分デ山シイ事ガ無イカラ俺ノ思フ通りニシタ、ドーセ女ニハ男ノ氣持ハ判リヨ一ハ無い、俺ハアキラメタノダ、シカシ、シカシダ、君ハ判ツテ居テクレルト信ジテキタ、所ガ君マデモ俺ノ氣持ガ判ツテクレヌ、俺ハ情ナイ、君マデガ俺ト御里サング何カ有ルト思ツテキル、止メテクレ、君ハ苦勞シタトユ一ガ、ドーユ一苦勞ノ仕方ヲシタノダ、君ハ五十ノ坂ヲコシテ世ノ中ガ判ラヌノカ、女ノ苦勞ヲ君ハ知ラヌノデ其レデ判ラヌノカ、俺

ガ證文ヲ書クト言ツタノハ、何モ俺ガホント一ニ御里サントカンケイガ有ツテ、別レルトユ一ノデハ無いノダ、ホント一ノ事ヲ判ラセル事ガ面倒ダカラ、俺ガヌレ衣ヲ着ルツモリナノダ、ドーセ幾ラ口デスツバク言ツテモ女ニホントノ事ハ判ラヌ、ソレヨリモ俺ガ惡者ニナツタ方ガ早イカラダ、女ハ其レデ良イ、シカシ、君ガ判ツテクレヌ事ハ俺ハ何ヨリモ情ケナイノダ。ソ一言ツテ西口ハ涙ニヌレタカホデ俺ヲ見タ。ソ一カ、其レハ俺ガ惡カツタ、スマナカツタ、ト俺ハ言ツテ深ク頭ヲタレタ。五十年ノ苦勞ノ仕甲斐モ無ク、コレ位ノ事ノ真相ガ判ラズ、親友ヲウタガツタ事ガスマナカツタト共ニ自分自身ガ情ケナク思ハレタ。俺ノ目カラモタラタラト涙ガ落チテ來タ。



二月八日

イヨイヨ廣公ガ棧橋ノ方ヲ止メテ、引キコス事ニ成ツタノデ、俺モ引キコス事ニシタ。天ガイノ孤兒タル俺ニ何ノ荷物モ無イ。シタガツテ引キコシト言ツタ所デ少シノ面倒モ無イ。コーナルト、コノ身輕サモ何カ樂シイ、柳ゴ一リ一ツニ梅ノ鉢ガアルダケダ。俺ノ財産全部ハ廣公ノ荷物ヲ積ンダ馬車ノハシニ乗セテ貰ツタ。廣公ノ今度ノ家ニ行ク途中ヲ一寸入りコンデ西口ノ家ノ前マデ馬車ヲヨセテ貰ツタ。馬車ノゴリゴリト鳴ル音ガスルト、御米サンガ出テ來テ、柳ゴ一リヲ運ビコンデクレタ。常坊ガ出テ來テ、小父チャン、家ノ人ニ成ルノカイ、ト言ツタ。アー、ヨロシクタノムヨ、ト言ツテ俺ハ大切ナ梅ノ鉢ヲカカヘテ入ツタ。時々アソビニ來テクレヨ、ト廣公ト御村サントノ姿ガ馬車ト一シヨニ行ツテシマツタ。

96

ヒルスギニ西口ガ警察カラ歸ツテ來タ。異動研究會ノ事デ了解ヲ求メニ行ツタト言ツタ。柳ゴ一リヲ其處ニナゲ出シテオイテ、今夜ノ引キコシ祝イノ爲メニ、山芋ヲ掘リニ二人デ山ニ出カケタ。

二月十日

今夜ハ奇タイナ日ダ。マダ、コーフンガ下ラヌ。コンナ目ニ合ツタノハ初メテダ。アキレテ物が言ヘヌ。

印刷所ニ黨ノ宣傳ビラヲタノミニ行ツタ歸リニ、アマリ寒イノデオデン家ニ入ツタ。スルト、其處ニ御里サンガ居ツテ、二階ガ開イテキルカラ上レト言ツタ。下デイト言フト、上モ下モ錢ニ變リハ無イ、一寸、話シタイ事モ

97



有ルカラ、ト引キズル様ニシテ俺ヲ二階ニ連レテ上ツタ。古イ家ヲ改造シタ  
ラシク、ツギハギダラケノ妙ナセマイ部屋ダ。其レカラ御里サンハ火鉢ヤラ  
酒サカナヲ運ンデ來タ。一寸話シタイ事トユーノハ西口ノ事ニ違イナイト俺  
ハ直感シタノデ、其ノ話ヲ言イ出シタラ、アマリ御米サンヲイジメナイ様ニ  
シテクレト言ツテヤルツモリデ居タ。所ガ、俺ノ前ニペタントヨコヒザデ坐  
リコンダ御里サンハ、何ニモ言ハズニ俺ニ酌ヲシタ。コイ白粉ヲヌツタエリ  
足ト、黒エリトガクツキリト光ル様デ、良イニホイガブーント俺ノ鼻ヲツイ  
タ。暗イ電トノ下ニ四角ナ白イ御里サンノカホガ浮キ出シタ様ダツタ。俺  
ハ胸ガドキドキ初メタ。手ガフルエル様ナ氣持ガシ、何度モ杯ヲ取り落シ  
ソニナツタ。御里サンモ杯ヲ持チ、俺ノ方ニ德利ヲオシヤツテ、ツイデ頂  
ダイ、ト言ツタ。俺ハ德利ヲ取り上ゲテツイダガ、德利ノ首ト杯トガガチガ

チト鳴ツタ。ドユー物カ、俺ハ女ノ前ニ出ルト何時モコダ。女ハニガ手  
ダ。御里サンハ其ノ杯ヲグット一口ニアケテ俺ニサシタ。俺ハイクラ飲ンデ  
モ少シモヨツテ來ナカツタ。モ西口ヤ御米サンノ事ナドドーデモ良イ氣ニ  
ナリ、早ク切り上ゲョート思ツタ。スルト、御里サンガ、細イ聲デ、大サン  
ハ童貞ツテホントー、ト言ツタ。熱イ息ガ七リンノホテリノ様ニムツトアタ  
ツテ來ル様ナ聲ダツタ。俺ガダマツテキルト、大サンハ何十年モ前ニ別レタ  
女ノ人ニ義理ヲ立テテキルンダツテネ、斯的ネ、ト御里サンハ言ツテイキナ  
リ俺ノ手ヲニギツタ。フリホドコートシタガ御里サンノ力ハ意外ニ強カツタ。  
今夜、大サン、忙シイノ、ネー、泊ツテ行カナイ、ト御里サンハダンダン俺  
ノ方ニカホヲ寄セテ來タ。二ツノ赤イコショウノ様ニ、ウスイ口ビルガブツ  
トムクンデキル様ニ見エタ。俺ハガタガタトフルエ出シタ。アタシハホント



一ハコノ間カラ大サンノ事計リ考エテ居タノ、ユメニ見ルノ、アタシハ大サンガ好キダツタ事ガコノ頃初メテ判ツタノ、甚吉サン見タイナ唐變木ハ大キライヨ、ネー、大サン、トーフ姉御ハキライ、今夜ハ歸サナイワヨ。ムセル様ナニホイト一シヨニ、ヤワラカイ女ノカラダガ俺ノカラダニカラミツイテ來タ。俺ハム中デ立ち上ツタ。重イ鉛ガブラ下ツタ様ニ俺ハヨロメイタ。俺ハ其處ニ御里サンヲツキタホシテ、カイ段ヲ落チル様ニカケ下リタ。ウシロデ、大サンノ馬鹿、トヨバワルカン高イ御里サンノ聲ガ聞エタ。俺ハ入口ノナワノレンヲハネノケテ、一サンニ夜ノ中ニトビ出シタ。

アキレタ。マダ胸ノ動キガオサマラヌ。

二月十一日

又風ヲ引イタラシー。又聲ガ出ニククナツタ。今日ハ紀元二千六百年ノ紀元節ダ。コンナ日ニネテ居テハイカント思ツタガ、フトンカラ出ルト背中ガゾゴゾゴスル。仕方が無いカラ寢ル事ニシタ。奥ノ三ジョーノ部屋ダ。マクラ元ニ紅梅ノ鉢ガ有ツタ。表ノ方デ國旗ノ坊主ハドーシタカ、トドナツテキル西口ノ聲ガシタ。旗ガ立ツタラシク、風ガ有ルノカ、ハタハタト旗ノ鳴ル音ガ奥マデ聞エテ來タ。シバラクシテ西口ガ入ツテ來テ、立ツタママ、俺ハ今カラ建國祭ニ行ツテ來ル、御米ニ藥ノ事ハ言イ附ケテオイタカラ、ト言ツテ出テ行ツタ。ハハー、例ノ妙藥ダナ、ト思ツテキルト、案ノジョー、御米サンガヤカンヲ下ゲテ入ツテ來タ。其レヲ火鉢ニカケタガ、甘ズツバイツヨイニホイデ、其レガホシ柿ト金カントヲ輪切リニシテセンジタ物ニ違イナイ



事が判ツタ。聲ノ出ヌ病氣ニ成ツタ者が有ツタラ進メテヤロート思ツテキタ  
ノガ、又、自分ガ進メラレル事ニナツテシマツタ。其レニシテモ、廣公ノ家  
デ寢コミ、西口ノ家ニ來テ寢コミ、何トユエダラシ無イ事カ。モ一俺ノカラ  
ダニモヒビガ入ツタノダローカ。其ンナ馬鹿ナ事ハ無イ。俺ハマダマダ氣ガ  
イハ若イ者ニ負ケヌツモリダ。百マデハドーシテモ生キテ見セル。御米サン  
ハ、用事ガ有ツタラ、聲ガ出ンデシヨーカー、其處ニ有ルカネヲタタイテ下  
サイ、タイクツダツタラ其處ニ日月ボールガ有リマスカラ、ト笑談口ヲキイ  
テ笑イナガラ出テ行ツタ。ホシ柿ト金カンノ汁ヲノンデカラ、俺ハシバラク  
眠ツタ。物音ニ目ヲサマスト、マクラ元ニ西口ガ坐リコンデ居タ。俺ガ目ヲ  
アケルト、オイ、俺ハ今建國祭カラ歸リニ氣ガ附イタ事ガ有ルゾ、オ前ノ風  
ハタダノ風ヂャーナイ、昨夜、身ニシミタ戀風ヂャ、ト西口ハ言ツテ大キナ

口ヲ開ケテ笑ツタ。笑談ユーナ、ト俺モ出ヌ聲ヲ出シテ笑ツタ。

所デ俺ハコノ間カラ考エテ居ル事ヲコノ際實行スル事ニシタ。其レハ小説  
ヲ書イテ見ヨート言フ事ダ。ガラニモ無ク文學老年ヲ志スワケデハナイガ、  
コノ間カラ良ク昔ノ事ヲ思イ出スノデ、自分ノ一生ノ事ヲ書イテ見度クナツ  
タ。自ジヨ傳小説トユエ所ダロー。小説トモ成レバ、文章モ氣ヲ附ケネバ成  
ラヌシ、片假名ノ小説トユエノモオカシナ物ダロー。日記ヲ書ク様ナ具合ニ  
ハ行クマイカラ、中々骨ガ折レルダロー。コーナルト俺ノ無學ナノガ齒ガユ  
イガ其レガ又今更ドーナル物デモナイ。判ラヌ字ハ後デ西口ニ聞イテナホセ  
バ良イ。マー、一ツ、又、トク意ノ熱ト意氣トヂヤツテ見ヨ。



小説「鈴木大助一代記」

一、發端

大助は今てくてくと榮町の歩道の上にさしかかった。ぼろの着物と言ふほどでも無いに、どしした事か、同志切れではあるが、尻には大きなつぎが仕て有る。初冬の日には彼の上にきらきらとかぐやいて居る。今日は近頃にならない珍らしい小春日和みたいだ。とは言へ、ひとり者の彼の事、あまり汚れて出せないのか、其れとも破れて無いのか、袖口からにゆつと兩手を寒さうに附き出して、肩をすぼめながら、其れでも此の男、何思つたか、立ち止つて、あたりをじろじろ見廻して居る。彼は誰かを待つて居るのであるか。町が

珍らしいのであろか。もう何年も住み附いてゐる町が別段珍らしいわけでは有るまい。世の中に變り者はすい分多いが、凡そ、此の男ほどの變り者は少いだろ。變態と言はうか、性格破たん者と言はうか、形容の言葉が無い。

三つの時に母と生別して、十か十一の時父に死なれた。其れからは伯父に引取られて、二年斗り學校に通つたが、其れはすい分成績は良かつたが、意地悪の伯母から此の子は學校が嫌らひでと中傷され、一日中、勤めの爲めに家に居らぬ一徹者の伯父から商店に奉公にやられた。

さて、舞臺が變つて、名古屋から信州鹽尻までをつなぐ中央線の鐵道工事は此の頃眞最中。濱田組誰々、星野組誰々、中山組誰々、と言ふ看板見たいな表札をかけた掘立小屋は、街道の到る所に何十何百と立てられ、つるばしを振り、もつこをかつぎ、とろを押した土工連中は夕方に成ればどやどや



と此の掘立小屋に歸つて來る。夕食時から皆が寝る迄のいや其の賑やかな事、喧しい事、物すごい事、酒を飲んでくだを巻く者、くりからもんもんの文身を出して、何で、手前達が口しやくをぬかしたつて、仕事と喧嘩なら俺が本家だ、俺の言ふ通りにしろつてんだ、文句の有る奴はどいつでも何とかいつて見ろ、とあたりをねめ廻して居る有様だ。

印半天計り着た連中の集る此の掘立小屋の表に、今珍らしくも十二三の子供を連れて一人の洋服姿の男が立つた。

「おいおい、星野は居るかね。」

と言ふ聲を聞いて、ふと戸口を見た連中、あはてて半天を着るやら、坐り直すやら、急に静まり返つてしまつた。中の一人が

「へー、此れは鐵道の旦那でござんすか。手前親分は四細あつて實は今居ね

ーんで」

「はははは、そー皆が堅く成つてくれば困るがね。實は仕事上の事で來たのではないのだ。僕が事務所に歸らうとして居る前を、此の子が如何にも腹が減つた、具合でも悪いと言ふ風で、とぼりとぼり歩いて行くから、呼び止めて事情を聞いたのだ。所が親父が死んだので信州松本の伯父に引き取られたが、好きな學校は意地悪の伯母の口から止めさせられ、奉公にやられたが、東京で親父が病み附いた時に別れたのみで、死に目に合つて居ないものだから、親父が死んだと言ふのは嘘だと思へて仕方が無いと言ふのだ。其れで東京に行く積りで松本を立つて、今日で三日何も食べずに歩いてゐるそーだ。」

「へー、すると旦那、此處から中津川へは直ぐ其處だ。名古屋だつて高が知れて居るが、えーと、ははー、するてーと、鹽尻から甲州へ入る奴を間違へて



本曾路に入つたもんだから、其れで此んな所へやつて来たと言ふ譯ですわ。」  
「そーらしいのだ。其れで實はあんまり可愛そーな物だから、お前とこの親分は仲間でも顔前だし、人情にも富んだ男だから、僕も明日幾らか届けるから、仲間内で出し合つて此の子を中津川から汽車で東京に歸して貰ひたいと思つて、相談に實は来たのさ。ほんとは松本に歸す方が良いとは思ふが、何しろ此の山計りの道を此の子一人歩かせも出来ないし、此の子も二度と松本には歸りたくないらしいし、東京に行けば知人は幾らでも居ると言ふからねー。」

「へー、そーゆー事ですか。そりや譯の無い事です。親分連中に相談仕ませんでも、あつしが飯場の二三箇所廻れば、直ぐ出来ませー。まして旦那の御聲がかりですもの。おい、小めーの、こつちへ入んねー、遠慮する事はねー。」

よ。」

「では、僕は此れで歸るから、くれぐれも親分によろしく言つてくれ。では頼んだよ。」

「へー、よろしゆー御座います。」

と言ふ風で、鐵道技師と土工の情に幸にも助けられ、生れ故郷の東京に辿り附いたのは、大助が十三の時であつた。

話はすつと坂上つて、西南役當時の事に成る。

大助の父鈴木大五郎は田原坂の激戦に官軍の六番隊長として奮戦中、腰部を射たれて後送された。其の後体内に止まつた今で言ふだむだむ弾を取り出した。大きな傷跡が出来たが、片輪にも成らず、其れからは武から文官に代り、辭令一枚で左右される浮草稼業を暫く續けて居た。五等官出仕と成つて



から間も無く、一身上の都合で役人から商人へ轉向した。今時の人の口にさへ残る、士族の商賣、見事に失敗して、廢藩置縣當時下附された何千圓かの一時賜金もすつからかんに成り、其れからの大五郎の生活は餘りにも恵まれ無い生活が続いた。其の後年月は流れて、花やかな商人を夢見てゐた時代に生れた大助が十一に成つた時、彼の父は病に倒れて、再び起きず、彼の世の人と成つたのである。其の當時彼の親戚知己には相當の地位に有る者も數多くあつたが、落ち振れて袖に涙が何とやらで、信州松本で中學校の英語教師を仕て居る大助の伯父が彼を引き取り、大助の父大五郎は病氣の身體を、其の當時陸軍少佐成りし人に嫁いで居る大助の伯母が引き取り、其處で大助の父は我が子に末期の水も取つて貰へず寂しく息を引き取つたのだ。

今、上野公園に程近い谷中の墓地で、十二三の子供が一人、一つの墓表の

前に立たずんでさめざめと泣いて居る。

雲は低くたれこめて今にも降り出しそゝな空模様だ。墓所を區切る柴垣は青々と生え茂り、近くの森でみーんと鳴く蟬の音が此の靜寂な墓地の空氣を破る様に聞えて来る。大助は氣車が新橋に着くと、我が父の生死を確める可く、わき目も振らず我が家の墓所に駆け附けた。墓地の入口の茶屋で水と櫛を貰ひ、男衆に案内されて附いて行つた。しかし其れは父と二人で何度も來た事が有るので良く覺えて居る道であつた。さて、來て見れば、若しやと思つた事は自分の夢であつた。木の香もまだ新しく立てられた墓表には寢た間も忘れた事の無い懐しい父の名がはつきりと書かれて有つた。大助は墓表の前にもぬか附いたまま、何時までも何時までも泣いて居た。谷中名物の蚊が彼の首と言はず手足と言はず取り附いて血を吸つて居るのも、悲歎に暮れた大



助には一向に感じない様子であつた。

此れが彼鈴木大助が實社會に一步を踏み出す様に成つた、否、出さねば成らなくなつた當時の情景で有る。(續く)

二月十四日

此ノ間寢コンダ時ニハ、金カントホシ柿ノ汁ヲ二日飲ンダダケテ聲ガ出ル様ニ成ツタノニ、今度ハ少シタチガ悪イノカ、マダ聲ガ出ナイ。醫者ハ、氣カン支ニ一寸故障ガ有ルガ、大シタ事ハ無イ、タダ煙草ハ飲マン方が良イト言ツタダケダ。煙草ヲ禁止サレタノハ一寸ツラカツタガ、ノドニ惡イトユ一ノダカラ我マンスル事ニシタ。昨日廣公ガ見マイニ來テ、石炭賃銀問題ガ少

シ面倒ニ成ツテ來ソーダト話シテ居タ。廣公ノ今度ノ勤メロハ運送屋ダガ、直接ノカンケイハ無イラシーガ、矢ツバリ石炭トハ切ツテモ切レヌツナガリガ有ルラシー。ドーモ石炭トハ腐レ綠ダヨ、ト言ツテ廣公ハ苦笑シタガ、俺ハ其レヲ聞イタ時ニ何カ冷ヤリトシタ。近イ内ニ港ハ石炭ノ事デ何カ持ち上ルカモ知レンヨ、ト、謎ノ様ナ言葉ヲ殘シテ廣公ハ歸ツテ行ツタ。  
デハ今日モ又小説ノ續キヲ書クトシヨ。

## 二、店員時代

當時は木橋で有つたが、名丈けは名高い日本橋、其の橋際から廣い一角を占めて、威勢の良い兄ちゃんの聲聞きながらあらゆる數多い魚の山を見る。



大江戸の昔から今東京のすべての階級の御臺所を一手に受け持つ魚河岸。其の河岸沿ひに通ち抜けて橋を渡れば、此處霞町の大通り、街路に植ゑられた柳は今にも芽を出しそゝに、ふくらんだ枝をなよなよと早春の風に靡かせて居る。

とある商店の中で、二人の店員がしんみりと仕た風でひそひそ話。

「大どん、私も此の店に来て二十年餘りに成るが、其の時は今の店と違ひ、奉公人も私一人切りで、前の大旦那と二人で一生懸命に、帳面をとちたり、木版でけい紙を刷つたり、毎日夜業して働いた物だ。今でこそ日本橋のはい原と肩を列べて、小間紙なら東京で一二を争ふ店と成つた。所が、此の頃の有様は如何だろー。大旦那が死なれて、今の若旦那の代に成つてからは、藝者にのろけて入りびたり。時々遊び人風の男が来るだろー。あれは其の藝者

屋で博奕をして借りた金を取りに来るのだよ。品切れの物が有つても仕入れ無い。店は私任せ。うちに來れば何でも有るのと、品物が堅いので人氣を取つた此の店も、今では日一日と寂れる計りだ。其れで私も如何か仕なければと思ふけれど、若旦那が店の金を持ち出す計りで仕入れを仕てくれぬ故、私の力ではもー如何にも出来ない。此のまま店のつぶれるのをちつと見て居られぬ故、私は若旦那に意見の書き置きを仕て自分の家に歸ろーと思ふ。大どんは此の店に來てから四五年位しか成らぬが、二年目から注文取りに成つた。其れに他の注文取りよりは非常に成績も良い。私が居なく成つても大どんは店の爲めにしつかり働いて御くれねえ。」

大どんと呼ばれる店員は目に一ばい涙を浮べながら

「定どん、若旦那は此の頃何時も店に居ないし、御かみさんは何時も病氣で



寝て計り居る。私の今頼りに思ふのはあんた計りだ。其のあんたは居なくなるし、注文されても品切れ計り。注文を取つて儲けた其の下りを貰つて今日迄貯金して来た金も、今は旦那の手に有る事やら如何やら。其れ計りでは無い。私の身元引受人のあの丸の内の油會社に勤めて居た人が、九州の門司に轉勤するから、御前のこん意な風呂屋の主人に受人に成つて貰へと葉書を一本寄こしただけで、店に挨拶にも来てくれないのだから其れ迄は銀行に行くのでも何でも、あんたの知つてゐる通り私計りにさせて居たのが其れからはさせない。受人の事で信州に手紙を出しても返事も来ない。大方伯母が見て伯父さんに渡してくれ無いのだと思ふけど。親父が生きて居た時、東京には大勢親類の者が居るけれども、今は身分が餘り違ふ故、出入を仕ない。其んな此んなで、何と親類の者が何處に住んで居るやら皆目私には判ら

ない。たつた一人尋ね出した親類の者は遠い九州に行つてしまふし、頼りにするあんたは此の店を出ると言ふし、私も一此の店を出て、こん意な御得意から注文を貰つて、問屋に頼んで品物を借して貰つて自分で商賣でも仕様と思ひますが。」

と言へば、定どんと呼ばれた番頭

「其れはいけない。今御前さんが此處を出たら此の店は如何なる。順ども種ども先日暇を取り、今得意廻りの出来るのは御前さん丈けだ。其れ計りでは無い。注文を取つて問屋から品物を借りると言ふが、御得意は此の店の物、問屋も此の店の物、御前さんの信用も此の店とゆゑ背景が有ればこそだ。若しも御前さんの云ふ通りにすれば、幾ら主人の行が悪くとも、主家に弓を引く事に成る。其れよりも、よしんば此の店が後にはつぶれるとしても、其



の最後迄あなたは止まつて辛棒仕なさい。若し其れ迄辛棒して、如何しても若旦那の行もなほらず、此の店がつぶれる様な事が出来た時には、其の時は仕方が無い。さい取でも、ぶろーかーでも何でも仕なさい。今は御前さんはさい取を初めるにはまだ年が若過ぎる。半年でも一年でも此の店の有る間、私に欺されたと思つて辛棒仕たが良い。其れから後の事なれば、御前さんが一本立て商賣を初めても、御得意も問屋も、御前さんに同情して萬事都合良く成る事は、此の私が受け合つて置く。」

「でも」

と、大どんと呼ばれた男が語をつごと仕た時、表に威勢の良い號外の鈴の音、日露開戦、日露遂に戦端の火蓋を切る、仁川沖で露艦二隻を撃沈、日露開戦々々、と、轟しい號外賣の聲。

「大どん、號外を一枚買つて来て御くれ。」

と奥から病氣で寝て居る内儀の弱々しい聲。

其れから四五日立つて、番頭定どんは此の店から去つて行つた。帳場の影で泣いて居たのは大どん。病の床の中で此の店の將來を案じて涙に咽んで居たのは此の家の内儀であつた。

### 三、横濱時代

番頭定どんが此の店を去つて、二度目の正月も早何時の間にもやら過ぎて、今は一番古顔に成つた大どんが、一人つくづく物思い。

「親は京橋で玉つき屋を仕て居るとかゆー近頃来た擦れ枯らしの源どん。旦那の親類とゆー京都から呼ばれて来た我が儘者の芳どん。源どんは使に出せ



ば何時迄も歸つて來んし、芳どんは自分の言ふ事を少しも聞かない。痲疾のりゆーまちが近頃大分良くなつて御内儀さんも店に出るけれど、何時もぶりぶりと機げんが悪い。無理も無いと思ふけど、其れは自分の知つた事では無い。定どんが店を去る時言つた言葉に随つて、今日迄辛棒したけれど、もー如何しても辛棒する事が出来ない。貯金も要らない。着變へも要らぬ。どーせ頼んでも暇は呉ぬに決まつて居る。今日は着のみ着の儘で此處を出よー。」

其の後、彼の姿は此の店に見えなかつた。

話變れば、五港の一つ、此處横濱は櫻木町のすてーしよん。今しも附いた汽車からそろそろと下り立つた一群の客。其の中に大どんの姿が有つた。立縞の木綿の着物に角帯しめて、前だけ掛け姿だが、其れでも羽織と前掛けの裏は海氣か何かと見え、時々きゆきゆと衣づれの音が聞える。肩には重たげ

に大形の竹行李をかついで居る。開札口を出て待合室に入つた彼は、一時間餘りに成るに、ちつと腕を組んで考へこんだ儘、腰を上げ様とも仕ない。

所へ、後から近寄つて來た此れも商人風な四十がらみの男。懷から巻煙草を取り出し、すばすばと吸つて居たが、其の目はたえず大助に注がれて居た。外には馬車や人力車の轍のきしる音。人々の呼び聲。氣車の氣笛。遠くで太く聞えるは氣船の號音。砂塵はもーもーと立ち上り、目も口も開けられぬ有様。雑踏の音には馴れ切つた彼の耳には、其れ等のけたたましい物音も何の感じも與へぬかの様に、大助は尙も首うなだれて考へこんで居る。先程からじろじろと大助を見つめて居た男が、やがてにたりと怪しき笑みを洩らして大助の方に歩み寄つて來た。

日露の戦終つてから、日一日と好景氣の浪は何時しか消えて、不景氣風は



吹き荒び、浪立ち騒ぐ其の中に喘ぐ世人は、何れも舟が沈むか浮び上るか、好むと好まざるとを問はず、いやでもおーでも、食ふか食はれるか、必死の闘争をせねば成らぬ。其の様な時に年齒も行かぬ大助は何目的に地理不案内の横濱に來たので有ろー。ああ、人の命や烏羽玉の、一寸先も判らぬ世に、さまよい出たる大助は此れから一體如何にして行くつもりである。横濱すてーしよんの待合室で彼に近附いて來た商人體の男は何者であるか。話はいよいよ佳境に入る。(續く)

ヤレヤレ、クタブレタ。

二月十七日

此ノ間カラ西口ガ彫ツテ居タ木ノ地藏尊ガ出來上ツタノデ、ウルシ塗リヲ手傳ツタ。此レハ西口ガ初メ氣乗リガシナイト言ツテ居タノニ、彫リ上ツラ見ルトリツバナ出來デ有ツタ。俺ハスリ鉢ノ中デウルシヲ玉子ノ白味デトカシナガラ、手際良ク刷毛デウルシヲ塗ツテ行ク西口ノ器用ナ手先キヲ眺メテキタ。マルデ着物ヲ着ル様ニ木目ノ出テキル地藏尊ノ肌ガ次第ニ隠レテ行クノハ面白イ様ダツタ。スルト、俺ハ何氣ナシニ地藏尊ノカホヲ眺メテキタノダガ、フツト此レハ誰カニ似テ居ルト思ツタ。其ノ地藏尊ノカホガ妙ニ四角張ツテキル事ニ氣附イタノダ。俺ハハツトシテ西口ノカホヲ見タ。西口ハ一向何モ氣附カヌ様子デ、ダマツタママ、熱心ニ樂シソニ刷毛ヲ動かシテ居



タ。俺ハ西口ノ心ノ祕密ヲ見タ様ナ氣ガシタ。シカシ、俺ハ其レヲ言ツテハナラス事ダト思ツタ。俺ハ目ノサメル様ナ思イデ、スリ鉢ヲマゼタ。地藏尊ハ黒イウルシデ次第ニ木目ガカクレタ。

124

二月二十日

今日モ寒イ。昨日ノ雪ガ消エズニ残ツテ居ル。冷イ風ヲ吸ヒコムト咽喉ニシミル様ダ。ホントーニハマダ風ガナホツテ居ナイノカモ知レヌ。

俺ト西口トハ仕事場ニ坐リコンデ將棋ヲサシテ居タ。飛車ト角ヲ下シテ貫ハント勝負ニナラス。將棋盤モ駒モ西口ガ自分デ作ツタ物デ、一寸風變リナ物ダ。駒ノ山形ニナツタ先ハ、王様カラ金銀ヲ初メ、歩ニ到ルマデ、十二支

ノ動物ガ手ノコンダ細工デ彫ラレテキルノハ一寸乙ダ。勝ツタリ負けタリシテ四五番サシタ。常坊ガ日月ボールヲ下ゲテ來テ、オ父チャン、此ノトンガツタ先ニカブセル物ヲ買ツテクレ、玉ガブツカツテ折レル、ト言ツタ。折レルモンカ、ト西口ハ盤カラ目ヲハナサズニ面倒クサソ一ニ言ツタ。折レルヨ、ト常坊ハ西口ノ肩ヲユスブツタ。折レタラ又買ツテヤル、ト西口ハ少シ強イ語調デ言ツタ。常坊ハ其ノケンマクニ恐レタノカ、一寸ダマツタガ、其レデモ、オ父チャン、又買フト十錢ダヨ、其レヨリカブセ物二錢デスム方ガエーヨ、ト言ツタ。俺達ハ顔見合ハセテ笑イダシタ。西口、常坊ノ方ガ君ヨリモ經濟ニ明ルイヨ、ト俺ハ言ツテ笑イ、ナケ無シノ財布カラ白イ一錢ヲ二枚出シテヤツタ。

カラシコロントユー下駄ノ音ニフリ返ルト、ガラス窓カラ丸マゲノ御里サ

125



ンガニコニコトノゾイテ居タ。俺ハビツクリシテ、モ一胸ノ動キガ打チ出シ  
タ。御里サンハ一向俺ナド眼中ニ無イ様子デ、甚吉サン、京都ノ姉カラ、京  
名産ノ吹キ寄セテ送ツテ來タカラ持ツテ來タノヨ、大變オイシインダツテ、  
ト、ソ一言ツテ、赤イ風呂シキ包ヲ窓ノ上ニオイタ。御里サンガ窓ノ方ニ傾  
イタ時、ブーントムセル様ナニホイガ流レコンデ來タ。俺ハ其ノニホイニ鼻  
ヲツカレルト、妙ニカラダガ小キザミニフルエテ來タ。アリガト一、ト受ケ  
取ツタ西口ハ、何、桂ノ瓜、加茂茄子、桃山大根、山科西瓜、鹿ヶ谷南瓜、  
ト、レツテルヲ讀ンデ居タガ、オーイ、御米、御里サンカラオ土産ヲ貰ツタ  
ヨ、ト奥ノ方ニ向ツテドナツタ。俺ハ御米サンガ奥ニ居ル事ヲ知ツテ居タ。  
セマイ家ダカラ、大キナドラ聲ガ聞エナイハツハ無イガ、返事ガ無ク、御米  
サンハ出テ來ナカツタ。向フノ屋根ニ残ツテキル雪ノ中ニ、窓カラノゾイタ

御里サンノカホハ有ツテ、寒サノセイカ、何時モノ様ニ白ク浮イタ様ニハ見  
エナカツタガ、丸マゲノホツレ毛ガカホニ、五六スジタレカカツテ居ルノハ、  
一種ノセイエンナ美シサガ有ツタ。一寸ナメヲムイテ何カ言フ時ニハ、ビ  
カリト金齒ガ光ツタ。アタシガ鈴川ニ居ルト言ツトイタノニ、甚吉サンハ一  
度モ來ナイノネ、甚吉サンハ良イ女房持チダカラトモ角ダガ、ト、御里サン  
ハ俺ノ方ヲ向イテ、大サンハ一人者ダシ一ペン位ハノゾイタツテ罰ハ當ラン  
デシヨ一、其レニアタシハ今度若シカシタラ御嫁ニ行カナクテハ成ラヌカモ  
知レナイノヨ、ソ一シタラ折角今迄仲ヨクシテ貰ツタノニ、又合ヘルカド一  
カ判ラナイカラ、其ノ前ニゼヒ一度二人デイラツシヤイヨ、ト言ツタ。ドコ  
カ御里サンノ表情ノ中ニ、今マデ見タ事モナイ様ナ寂シサノ様ナ物ガチラト  
影ヲ落シタ様ニ思ツタ。ア一、ト西口ガ生返事ヲシタ。キツトヨ、ト御里サ



ンハオサエ附ケル様ニ言ツテ窓カラ離レタ。御里サンガ向フラムクト、ハダケタエリ足ニ、ヌリノ悪イカベノ様ニムラニ成ツタ白粉ノコナガ吹イテ居テ、黒エリガ白粉デ汚クヨゴレテキタ。其レヲ見ルト俺ハ何故トモ無ク、ホツト安心スル様ナ氣持ガ有ツタ。シカシ、一體全體アノ女ハ何ダロー。ドーモ俺ハ狐ニツマママレタ様デサツバリ判ラナイノダ。高下駄ノ音ガカランカラント雪ドケノ歩道ノ上ヲ遠ザカツテ行ツタ。其ノ音ガ消エテシマフマデ、俺ト西口トハ言合ハセタ様ニ耳ヲスマセテ居タ。足音が聞エナクナルト、急ニウロタエタ様ニ俺達ハ顔ヲ見合セタガ、西口ハ、モ一將棋ハ止メヨ一、ト吐キ出スヨ一ニ言ツテ立ち上ツタ。

夕方近ク、柳助ガ山芋ヲブラ下ゲテヤツテ來タ。山芋掘リノ病氣見マイニハ山芋ガ一番良カロート思ツテ、ワザワザ山ニ掘リニ行ツタンヂヤ、ト言イ

ナガラ、柳助ハコモデ巻イタ山芋ヲ高ク上ゲテ見セタ。三本共二尺ニ足ラナイ芋バカリデ有ツタ。其レデモ此ノ老人ハヒドク自慢ノ様子デ、此ノ雪ノ山ニ大サン達ノ様ナ素人ガ行ツタ所デ、一本モヨ一見ツケ出シハセン、ワシダカラ此ンナ大芋ガ三本モ見ツカツタンダ、ワシガ一本取ツテ、アンタ所ニ二本置イテ行クカラ、今夜ハトロロ汁デモ仕テ一バイヤンナサイ、風ニハトロロガ中々良イ、トソ一言イナガラ、柳助ハ一本ダケ又コモニ包ミカエ、白ガ頭ヲフリフリ蹄ツテ行ツタ。



三福湯



みんな来い、みんな来い、と龜之助はその邊をぐるぐると呼んで歩いた。このごろの毎日の習慣である。筒袖つとせうの着物を着た小柄な彼の後姿は猫背であるためか妙に寒さうに見えた。彼は小わきに蜜柑をいっぱい満した箆をかかへてゐる。その新鮮な青い葉のついた美しい蜜柑の色がいつそ彼の姿を見すばらしくした。しかし子供たちは一ぱん彼に親しんだ。すこしも恐くないからである。子供は黄色い亂杖齒などは尊敬しないのである。見くびられた龜之助は近所の子供たちから木の葉猿といふ綽名を貰つた。ごみごみした裏長屋を彼が歩いてゆくと、方々の家の中からたくさんの子供が飛びだして來



て、彼のうしろにしたがつた。

「さあ、今日の横綱は誰かのう」

龜之助は子供をぐるりと見廻していった。

「小父さん、今日は五番けしは蜜柑十箇くれや」

子供たちは既に前もつて彼等同志でちやんと話合が出来てゐるのである。

狡さうに腕白大將らしい少年がいつた。

「十箇もや」

と龜之助はわざとおどろいた顔をした。

「ああ、十箇」

「昨日は五つやつたぢやないかい」

「昨日は五つでも今日は十箇だよ」

十箇くれなげや角力をとらぬといふ口吻である。

「さうか、ええわい」

と龜之助は負けたといふ顔をしてみせる。

普請場には材木や石が雑然と積み上げられ、繩を張られた敷地の中には馬車で運ばれた赤土が亂暴に投げ出されてゐる。その赤土をかきながらして速製の土俵をつくる。土俵は毎日移動をする。或る日には土俵が同じ日に三回ほど場所を變へる。その土俵で近所の子供達が毎日角力をとる。たいてい二十人位も集る。物好きな青年達や、子供の親達もこれに加はる。力士の多い時には一箇の土俵で間に合はず、三つくらゐの土俵がつくられ、どの土俵でもはげしい勝負が展開される。龜之助が尻をまくり、團扇をもちだし、ねぢ鉢巻をして行司をやる。蜜柑が賞品である。賞品は或る時は林檎になつたり、



羊羹になつたり、鉛筆になつたり、ラムネになつたり、繪本になつたりする。ところがこの普請場の大角力の魂膽をついに子供たちが見破つた。狡猾な大人達が敷地の地づきをするのに、高い給銀を出して人をたくさん雇ふかほりに、子供達に角力をとらせ、地を踏みかためさせるのだといふことを知つたのである。しかし、それにしてもせめて賞品の蜜柑を倍にさせる位が子供達の大人への復讐であつたのである。さうして少年達は談合協議の上のはかりごとが見事に龜之助を屈服させたことで大いに満足し、その日も赤土を踏んで他愛もなく勝負に熱中した。

はじめはこんな調子であつた。三十年近くも前のことである。

その額には肉太なひねくつたやうな字で「水因三昧」と書かれてあつた。質草にとつてあつたのが流れたので恰度よいからと、高巢小三郎がそれを禿げ上つた頭の上のせて運んで来た。自分でかけるところをしきりに物色してゐたが、石榴口の上にそれをかけた。開業式の日である。それから、この遠慮のない男は、開業風呂にまつさきに入つた者は中風にかからぬ、といつて、ことわりなしに立てたばかりの新湯に誰よりも先に入つた。新しい大額であつた「水因三昧」も三十年の間湯氣にさらされて、朱の縁はゆるみ、紙は茶褐色にさまざまのしみをつくつくすんだ。

鳴り物入りで初まつた三福湯のはなばなしさが顧みられる。開業當時の困難さとともに、その浴場の性質によつて最初は精神的なものも若干はあつたのである。大正の時代が初まつたばかりの頃、或る傳染病がこの地方に蔓延



したことがあつた。それは僅かの期間で收つたが、間もなくこの近傍の地方に陸軍特別大演習が行はれ、高貴の人達が多く西下して來るといふことが傳へられた。同じ頃、この町にあつた風呂屋組合がいかなる理由からか、坂井町の梅の湯と、竹田通の辨天湯とを買収し、その經營者には月々の生活手當を支給することにして、この二つの浴場を取り壊した。このために附近の人達は大いに難澁した。止むなく少し遠くはあつたが、不便をしのんで竹井町方面の人達は達磨湯へ、竹田通一帯の人は吉野湯へ行くより外はなかつた。ものぐさな人達はあまり風呂にも行かなくなつた。そこで警察の或る人が近所ではあり、砦を打つので近しくしてゐた質屋の高巢小三郎に湯屋を一軒思ひ立つてはどうかといふことをすすめた。衛生上にも悪いし、近いうちにえらい人達が大量大演習に西下して來るといふのに、傳染病でもふたたび蔓延

しては困るといふのである。前々から金銭關係のことや政黨のことで、風呂屋組合長の玉田安造と心よからぬ仲であつた高巢は、今度の二浴場の買収を面白からず思つてゐた矢先なので、二つ返事でこれに乗り氣になつた。それにしてはひとりではなかなか困難であると思つてゐると、何かの序にその話が出て、隣同志である請負師の赤瀬春吉や、沖商をしてゐた清水龜之助が協力することになつた。藩政時代からの古い漢方醫である町會議員の馬越氏が土地を提供しようといふことになつた。新浴場建設の話が傳はると、近隣の人達も雙手をあげてこれに共鳴し、半分は彌次もあつて、せひひとつ頼みませ、とさかんに激勵した。そこでこの浴場の思ひ立ちといふのは、演説好きな町會議員の馬越先生の言葉を借りれば、とりもなほさず正義人道のためである、といふたいへんなことになつたのである。そこで早速浴場開設の願



書を出した。土地の関係で願ひ主は馬越氏になつてゐた。ところがどういふものか何時まで待つても許可が下らなかつた。たまたま、隣りの町で錢湯を思ひ立ち、それも許されずその風呂の處分に窮してゐる者があつた。それは嘗て四國邊のある町で經營してゐた浴場を取りこはして、自分の郷土で營業するために一切を運んできたのであつたが、簡単に許可されると思つて歸つて來たのに、計畫通りにいかず、持てあましてゐたのである。それを聞いた高巢は龜之助とはかつて、それらの一切の材料を千二百圓で買ひ取つた。これは足元を見こんだわけではなかつたが、はなはだ安い買物であつた。ところが、或るきつかけで、浴場の許可されぬ理由がわかつた。最初浴場を初めることを進めた警察の人にねちこんでみただけでも、いかんともすることが出来なかつた。高巢は市會議員の友枝氏とともに縣廳に行つた。保安課にか

け合つた。しかし、地方官の許可せぬものを縣廳で許可することは出来ぬといふことであつた。そこで、それでは共同風呂といふことにすればどうなるかといふことを、炭坑や工場などにある共同浴場を例にとつて質問した。當時、共同浴場取締規則がなく、縣では、營業でなく共同風呂といふことになれば止むを得ない、といふ返事であつた。歸つて來て早速その準備をすすめた。すると、今度は煙突使用願の許可がまた來なかつた。煙突がなくては風呂はたけない。さまざまのいきさつの果、やつと來た。建築は進み、派手な棟上げもすみ、秋も終りに近い頃、初めて煙突から煙が出た。この時、「水因三昧」の金額がかかつたのである。共同浴場入浴會員といふものを作り、會員以外の入浴を禁じ、電車の回数券のごとき入浴券を配付した。當時風呂屋組合の入浴賃は大人三錢であつたが、その半額の一錢五厘で入れたのである。



管理人として龜之助が當ることになった。龜之助に三十五圓、彼の女房に十五圓、合計五十圓が支給されることになったので、彼は沖商を廢業した。入浴者が多く大いに繁昌した。同時に、相かはらず風呂屋組合からの妨害が常に絶えない。會員外の者を入れた場合には最高二十圓までの罰金をとられることになつてゐた。他の風呂屋の廻し者が回数券を買ひに来て、これを會員外の者にやる。札を貰つた者が入りに来る。管理人である龜之助があまり頭がよくない上に、會員が多いと來てゐるので、一々會員の顔を覚えてゐない。そんな風にして何回となく罰金を取られた。入浴者が多くて困つた。ところが、初め、買ひこんだ罐かまがなかなか沸かない。水管式といつて吳で多年研究實驗したものだといふ振れこみであつたにもかかはらず、音ばかりごうごうと景氣よくて、肝心の湯が一向沸いて來ないのだ。お客は詰めかける。喧し

くいはれる。仕方がないので、赤瀬の家にある大釜で湯を沸かして、バケツや盥でどんどん運んだこともあつた。仲仕をたくさん持つてゐる赤瀬の家では荷役の関係でよく五十人から百人前くらゐの夜業飯を炊くことがあるので、特別な竈があつて、幾つ也大釜がかけてあつた。それで湯をわかつた。肥満してゐる赤瀬と、小柄な龜之助と、背のひよろ高い高巢とが、いづれも諸肌ぬぎになつて、汗にぬれ、せつせとバケツや盥を運搬するさまは奇體な圖であつた。彼等もわれながらをかしくてたまらず、おたがひの恰好を指さしながら笑ひ合つた。伊豫の風呂屋の外道げどされ、てんくらばかり言うて欺しくさつた、たいがいかの者ちや、今度見つけたら承知すりやせん、と、湯のわかない罐に憤慨しながらも、この珍妙な騒動がこの三人の男たちには楽しくてならなかつたのである。時には早魃のため節水で困つたり、その後も絶えな



つた風呂屋組合からの横槍に頭痛を痛んだり、經營のために借金をしたりしながら何年かが経つた。風呂屋組合も当初はさかんにいやがらせをしたけれども、いはゆる正義人道には敵することが出来ず、やがて組合の方から、營業風呂にして組合に加入して貰ひたいと折れて來た。

その頃、久賀國藏といふ者から千六百圓の借金をしてゐた。久賀といふのは昔黒田藩政時代にこの町に居城を構へて居つた大名の末裔で、廣大な地所と家作を有し、かたはら高利を以て金融を營んでゐた。當主は三十歳に滿たぬ眉目端麗の青年であつたが、その取り立ての苛酷さは先代に輪を三つかけたほどだといはれてゐた。然も、彼の女のやうな柔和な面ざしと、赤い唇と、やさしい物腰とに、最初接する者は多くこの年若い高利貸を與しやすしと見誤まるのである。それだけ後の反動がひどかつた。龜之助が期限の切れた借

金の利子を携へ、一箇月の延期方を申し入れに行くと、僅か二日超過してゐたのみであるにもかかはらず、既に抵當である浴場は二千五百圓で他に轉賣する契約が出来てゐるとの返事であつた。その證書が彼の前に展げられた。龜之助は駭いて、そんな馬鹿なことが、と思はず口に出た。身體がふるへた。國藏は子供の時から可愛がつてやつた男であり、その彼が自分に對してそのやうな仕打をしようとは夢にも考へなかつたのである。青白い青年は朱塗の長火鉢の前に端坐して、美しい二重瞼の眼をまたたきながら、駭きと憤りにふるへてゐる見すばらしい大人の姿を心よげに見つめた。龜之助は出された黒漆に金蒔繪の定紋の入つた茶器を取りあげ、しづかに出しがらの茶を飲んだ。氣持を落ちつけるためである。この女のやうな青年の前で取り亂すことがいまいまいかつたのである。それから彼はこの國藏の無邪氣であつた少



年時代のことに思ひを返し、自分が肩車をしてやつたり、蛭子神社の祭禮につれて行つてやつてうるさくねだる木曳提灯と豆電氣（妙に電氣仕掛の好きな子であつたと思ひ出される）とを財布をはたいて買つてやつたり、夏になると自分の沖賣りの傳馬船に乗せて鱧釣りに海に出たりしたことを心の中に思ひ描いてみるのであつたが、そのやうな無邪氣な少年が今自分の眼の前に冷然と坐つてゐる腹の立つ守錢奴と同一人であらうとはどうしても信じられないことであつた。然もそれが紛ふ方もなく同じ久賀國藏に相違ないと知る時、龜之助は人間の成長の不可思議さに背筋を逆箒でなでられるやうに鳥肌立つて來るのであつた。龜之助は猫背をいつそう丸くして、自分の手にしてゐる茶器をあらためてつくづくとながめた。彼は歴史などに向興味もなく、したがつて何も知らないが、自分も檀家である千海寺の亂塔場にいかにも古

びた一基の墓石があつて、それに彫られてある久賀筑前守時尙といふ名はよく記憶してゐる。その名の上にある鷹の羽の定紋もはつきりとおぼえてゐる。自分が片手にしてゐる茶器は昔時久賀家の祖先が、或は時の城主筑前守時尙が朝夕に茶を喫した折に使用したものであるかも知れない。黒漆は數個所剝げ落ちて檜の木目がそこそこからにぶい黄褐色の肌を見せてはゐるが、鷹の羽の定紋はしぶく沈んだ黄金色に今も莊重に光つてゐる。龜之助は仇敵を凝視するやうにその紋章から眼をはなさなかつたが、そこには人間の成長の祕密を解明するなものも見られなかつた。龜之助がいくら哀願してみても、國藏は、細い聲で、小父さん、もう駄目だよ、どうして二日早く來なかつたの、と繰り返すばかりである。今は小父さんと呼ばれることが全然違つたひびきをもつて龜之助の耳朵を打つた。しかし、この聲の調子が十數年



前に、蛭子祭禮の雑踏の中で、あの豆電氣買うてよ、と彼の肩の上で足をふんばつて叫んだ聲と、どこが違ふであらうか。龜之助は遂に借金を倍加するより方法が無くなつた。既に前金で取つてあるとのことであつたので、國藏から二千五百圓を改めて借用し、新しい證文を又一枚書いた。それを持つて浴場の買ひ手のところに行つた。すると、雑貨屋の主人であつた買ひ手は、買收についてはいろいろの経費もかかつてゐるし、三千圓でなければ賣ることが出来ないといふことであつた。こんな馬鹿な話があるだらうか。現在浴場は自分たちの手に依つて遲滞なく毎日經營されてゐる。それに陰にさういふ人達が居つて、紙と口上とだけのために借金を増さなければならぬ。龜之助はあきれたが、もはやいかんとも術のないことであつた。國藏のところにもたたび無心に行くのも業腹なのでその足りない分は高巢小三郎から出して

貰つた。彼等の共同浴場は解散され、營業風呂として再出發をした。敢然として迫害の中に經營されて來た正義人道の共同浴場はここにただの錢湯になつたのである。高巢、赤瀬、龜之助、の三人の合資になるところから名も三福湯と改められた。

この地方にはあまり雪が積るといふことがない。年々雪の量が減つてゆく。産業が發達し、工場が幾つも建てられ、人口が増加したためだと、土地の人は信じてゐる。珍らしく一尺に近い雪が降つた日、三福湯の中で、赤瀬春吉の父が卒中で殞れた。七十を越えてゐた老人はたつた一人で朝湯に來て、誰も見てゐない浴槽の中で靜かに死んだのである。早朝であつたために誰もまだ番臺に居らず、龜之助は罐場の屋根の上で龍舌蘭の葉に竹の輪を巻いてゐた。日當りのよい屋根の上にあげたものの、この熱帯植物がまつすぐに堅く



はのびず、飴のやうに曲るので、支へるために鉢の中に竹の垣をつくつたのである。浴槽の中に沈んでしまつてゐた老人の屍體は朝湯の客に發見された。葬儀などもとどこほりなくすんだ。もう惜しくない年だつたのぢやから、と赤瀬春吉は歎く色も見せず誰にもさう挨拶した。しかし、その後、赤瀬が自分の父のことを人に話す時には、必ず、三福湯で安樂な往生をとげた、といふことが附け加へられた。磊落なこだはりのない赤瀬は別に皮肉をいつてゐるわけではなかつたが、龜之助はどうもそれが聞きづらかつた。それに、誰いふとなく、あまり熱い湯に入つたのがいけなかつた、何度も水をうめて貰はうと思つて手をたたいたのに、誰も番臺にゐなかつた、相手にならなかつたといふやうなことが巷間で噂されてゐることが龜之助の耳に入つた。彼は女房のとくに、だから俺がいはんこつちやないぢやないか、俺の留守にはい

つでもお前に番臺に坐つとれとあれほど云ふといぢやないか、とおこつた。「あたしは見せ物みたいにあんな臺の上に坐るのはいやですよ。女郎ぢやあ  
るまいし」

とくはさういつて、首をかしげ、簪をぬいて後首のところを搔いた。彼女はさういふしぐさが好きなのである。

「なにいふか。商賣ぢやないか。なにも見せ物ぢやないやないか。俺たちは面白づくで風呂屋をしてゐるのぢやないのだ。おまんまのためぢやないか。

風呂屋の女房が番臺に居るのはあたりまへだ」

「あたしは風呂屋はきらひですよ

「今さらそんな」

「なんでも、あたしは番臺だけはかんにんですよ。今日は三郎が休みですよ。



遊ばせといたらろくなことは覚えぬから、三郎を坐らせときなさい」

龜之助はそれ以上はなかつた。彼は愚直ではあつたけれども従順であつた先妻のことを思ひだした。しかし、それは後悔といふ氣持ではなかつた。きよが生きてゐたならば、むろん風呂屋はきらひだなどと云ひはしないし、こちらから云はずとも毎日番臺に坐つてゐた。しかし、二人の子供を残して死んだ先妻のきよにはどこにもなかつたものを、後妻のときは持つてゐた。それを望んで貰つたのであつてみれば、とくに對して、きよと同じものを望むことはそれは贅澤といふものである。と、彼は算術のやうに明快に自分の心理を割り切つてゐるのである。彼は彼に反撥して來る女房の氣負ひを受けかねたやうに、負けた顔をしてみせるのだが、背中をむけると同時に、唇がうづうづとほぐれて來るのであつた。

風呂でさへも三十年も経てば人間と同じやうに一つの風格が出来るものである。當初建築した時と現在とはだいぶ様子が變つた。浴場とて時代の推移に後れるわけには行かない。石榴口が硝子戸になつた。板張りであつた流し場がタイル張りになつた。着物入れの丸籠も壁にはめこんだ整頓棚にした。體重器や鏡臺も置き、一錢入れれば自働的に開くボマードとクリームの箱も備へた。壁には毎週活動寫眞や芝居などのけばけばと派手な石版刷りの廣告ピラが取りかへられた。水氣のため腐蝕する柱は數回取りかへた。この近所は仲仕などの勞働者が多いために、入口から流し場まで狭い通路を設けて、そこに四角な洗足場を作つた。石炭でまつ黒に汚れた仲仕達が跣足で來てそ



こで一旦足をきれいに滌いでから入るためである。男湯と女湯との境界の板壁には両方とも大型の扇を取りつけた。おきまりのペンキ繪の富士山と白帆と松原とが畫かれてゐる。紐がついてゐて引つばると、發條がぎいぎいと鳴つて風が来る。冬分には用がなく埃を被つてゐた。このやうに最初の共同浴場時代の質素な浴場とは少しく趣を異にしては來たけれども、全體としての骨組は少しもかはらず、年月を経た家としてのさびがどこともなしに滲み出てゐた。石榴口の上にかけられた古ぼけてくすんだ「水因三昧」の大額がその全體の押へのやうにいよいよ坐りのよさを示してゐた。しかし、さういへば、最も坐りがよくてさびの出たものは番臺に端坐してゐる龜之助自身であつたかも知れない。小柄な彼の姿は番臺に上るとまるで首だけ出してゐるやうに見えた。彼は何時も眠つたやうな魯鈍な眼つきをして、据ゑ物のやうに

ほとんど動かなかつた。彼の頭髮は大半白くなつてゐたが、常にくりくり坊主に剃つてゐたので、いつも青々としてゐた。それはつくね芋のやうに恰好が悪かつた。彼は客が入つて來る時と出て行く時には必ず、へい、どうもありがたう、と聲をかけた。彼は番臺に置かれてゐる一個の自動人形のやうな鈍い單純な動き方しかなかつたが、彼が何も考へてゐなかつたわけではない。彼がこの退屈な番臺を退屈と思はなくなつたのは長年の修練にも依るが、一つには彼は浴場の中の世界に或るたのしみを持つてゐたのである。最初彼はそれを觀察者のやうに眼をきろきろさせて知らうとつとめたが、次第にそのやうなわざとらしい眼付をしなくなつた。外目にはどろんと思考を失つたごとく見える眼の奥に彼は人間の裸體の生活をつぶさにかがつかつた。着物を着てゐる時の人間と、裸になつた時の人間とが、どうしてこんなに變るもの



であるか彼には不思議な気がするのである。氣むづかしやが風呂の中ではきはめて氣さくになつたり、おしやべりが着物をぬぐと妙にむつつりしたり、人に何かと叱言をいふ男が流し場では立つたまま桶の湯をかぶり、あたり近所の人にしぶきのかかるのをまるでかまはなかつたり、日頃實直な果物屋が裸になると全身に岩見重太郎の刺青があつて、急に傳法になつたり、——そんなことを見るのは毎日のことである。番臺の哲學者は或ひは強ひてそのやうに考へてみるのが好きであるのかも知れない。石榴口から先は湯氣のため濛濛と白くなつてゐるけれども話し聲はよく聞えた。喧しいのは女風呂である。近所近邊の悪口がさかんに交換されるのは女風呂である。人間はどうしてあんなに言はなくてもよいことを尤もらしく大聲で話し合はねばならぬのだらうかと思はせるのは女風呂である。彼は或る日、女風呂の湯氣の中で

時局問題が論じられてゐるのを聞いた。こんなに生活が窮屈になつてはたまらない、日本が現在非常な困難をしながら戦争を遂行してゐるので、それはわかつてゐるが、それかといつて、商賣も出来なくなつたり、米、マツチ、砂糖、炭、などといふ日常缺くことの出来ないものにまで不自由させられてはたまらない、とまあさういふ話である。

「でもねえ、それやさうだけれど、戦地の兵隊さんのことを思つたら、それ位の不自由なんでもないわよ。それにそんな家計のこと、女の役目でしょ。亭主にそんな心配までさせるのはいかんですよ」

ときんきんとひびく聲がいつた。龜之助は耳を疑つた。それはたしかに女房とくの声に相違なかつたからである。眼をこらして見たが、湯氣が立ちこめてゐるうへに、近來とみに視力の衰へた彼は何も見わけることが出来な



つた。我がままで放縦な女である彼の女房が、いつたい何時このやうに分別のある口を利くやうになつたのであらう。家庭の中でとくがこのやうな口吻で話をするのはつひぞ一度もなかつたことである。龜之助は狐につままれなやうになほも耳をすました。あとはがやがやと話し聲にまぎれ、湯をかぶる音がつづいて聞えただけであつた。

三郎は父を輕蔑した。母を憎んだ。彼はしだいに家の空氣が耐へられなくなり、つひに家出を決心するやうになつた。彼は工業學校を終へると町外れにある或る製鋳工場に入つた。あまり脊は高くはなかつたが、がつちりと廣い肩幅を持つてゐた。母の血を受けついたのである。小兵な父に比較して母

は大柄で、ばくたうのやうに頑丈であつた。黙々として働く牛のやうな女であつた。蚤の夫婦といはれた。その母は三郎が十四の時、妹の小梅を生んだ翌年に死んだ。母が死ぬと半年も経たぬうちに現在の母が入りこんで來た。伯父の妻すなはち伯母さんだつた人である。一年ほど前に伯父が仕事場で不慮の難のために死去した。後家暮しをしてゐたとくと、女房を失つた龜之助とを身邊の者が似合ひだとして世話することになつた。それは實は龜之助が懇望してそのやうに仕向けたのである。兄が在世中から龜之助は嫂の阿娜つばさに心惹かれてゐた。とくは自分の荷物の中でめりんすの袋につつまれた一桿の三味線をもつとも大切にしながら嫁入つて來た。新しい母は臺所や家計のことは全くかまはず、女中をやとつてそれに委せきりにした。これまでなかつた化粧品代といふ新入費が増えた。



彼女は小梅を非常に可愛がった。そして小梅が小學校に入る前から三味線を教へはじめた。三味線を下賤の音楽だと確信してゐる三郎はこれにまつ向から反對した。

「もつとまじめに小梅を育てて下さい」

と生意氣盛りの學生であつた三郎は母を面詰した。彼の眼に涙があつた。

「どうして三味線を教へるのがまじめか。娘のたしなみではないか。なにもわからぬくせに文句をいふな」

「お母さんは勝手が過ぎる。もう少しお父さんを大切にして下さい」

ははは、と、とくは切れの長い眉毛をひきつらせながら笑ひだした。

「子供に大人のことはわからないよ。いらん心配をお前がせんでもよい。お母さんはお父さんをそれはそれは大切にしていあげてゐるよ。そんなことより

か學校の勉強でもなさい」

「小梅に三味線を教へることは絶対にやめて下さい」

「まだいふか」

とくの白い手が三郎にとんで來た。長い爪が力のかぎり三郎の肩をつねつた。三郎は悲鳴をあげてたはれた。

身體の小さい小梅は小さい三味線をあてがはれた。毎日のやうに縁側に出て母は稽古をつける。小梅はなかなか覚えなかつた。それは彼女が頭が悪いのではなく少しも三味線など習ひたくはないからである。壺などはいくら示されても覚えなかつた。しかし師匠は一向そんなことに頓着しなかつた。間をびしたしまりのないとくの顔が三味線を手にとると妙に嚴肅になつた。それから、チチチ、ツツツ、ツンテン、と、顎で調子をとりながら、弦にあてた小



梅の指先をにらんだ。白魚のやうな細い指が壺を外れると、ほらまた、と眉を擧め、撥を持つたまま右手をのばして、釘ぬきではさむやうに邪慳に小梅の細い指先をつかみ、ぐいと壺に指を込らせて上からきつくおさへつけた。ここだよ、わかつたかね、と、師匠は弟子がうなづくまでその指の力をゆるめない。小梅は涙をためて、はいとうなづく。又、初まる。ツツンツツン、テン、チンチン、ほら、また違つた、と、白い手がにゆうつとのびて来る。どうしてさう覚えが悪いか、としまひに師匠は疳癩をおこす。いらだつて師匠は七歳の弟子の紅葉のやうな手の甲をつよくつねる。はげしい稽古のため小梅の左の爪はわれて血がにじみ、指先は荒い弦の手ざはりのために鞞のやうに切れた。稽古がすむと母は急にやさしくなり、菓子をやつたり、小遣ひをやつたりした。

或る時、とくの居間にかけられてあつた大小二本の三味線は手斧をもつて微塵に碎かれた。三味線は薪になつて風呂罐の中にくべられた。狷介な三郎は自分の行動に對していかなる措置が講じられるか、平然として待つた。とくはあきれ、それから笑ひだした。このやうな思ひ切つたことをする息子が恐くなつたのである。お母さんが悪かつたよ、ととくは三郎にあやまりをいひ、いつそう三郎を憎んだ。龜之助は三郎を別に怒らうとはしなかつた。ただ、あんな滅茶をしてはいかぢやないか、と、むしろ息子の機嫌をとるやうな柔い調子でいつたのである。三郎は濃い眉毛をあげて、お父さん、お母さんを少し怒つて下さい、といつた。さうか、ははは、と父はごまかすやうに苦笑をした。その笑ひ聲の中には、いつか母がいつた、子供に大人のことばわからないといふ、大人たちの最後の防壁を示す嘲笑のひびきがあつた。



そのやうな劃然とした垣によつて大人と子供との世界が全く近よりがたく區別されてゐるものであらうか。そんな馬鹿なことがある筈はない。三郎は伯父の生前のことをしみじみと思ひだす。伯父は運送屋であつたが、きはめて酒すきで、酒をのむとよく三郎を捕へて述懐をするのであつた。それはいつも妻のとくのこと、お前も大きくなつたら嫁を貰はにやならんが、うちの伯母さんのやうなだらしない人を嫁女にすんなや、三味線の音なんぞ好きになつちやいかんぞ、と、伯父は眼に涙さへためてくりかへしくりかへしいふのである。ほんたうには伯父のいふ言葉の内容がどんなことであるか、三郎にはわからなかつた。また、ほんの少年である三郎などをつかまへて、何故伯父がそんな内輪の恥をさらすやうなことを話したものか、腑に落ちないことでもあつた。一緒になる時には周囲のはげしい反對を押しきつて結婚し

たものであつただけに、そのやうな勝手をして營んだ夫婦生活がそんなに早く破綻を生じてゐるといふことを、伯父は意地から誰にも話したくなかつたものであらう。少年である三郎にそれを話したといふことは、伯父がその鬱憤をはかした獨語に過ぎなかつたものに違ひない。さういふことを後には三郎も次第にさとりやうになつた。しかし、伯父の意味ありげな愚痴の内容はやはり彼には覗ひ知ることが出来なかつたのである。その伯母が今自分の母になつて来て、はじめて彼は伯父のかけた謎の意味の一部を悟つたと思つた。しかし、三郎は生前伯父が洩らしてゐた愚痴について、もう、そのことを父に話す氣がしなかつた。話したところで、またも、子供がなにを知るものか、と一笑に附されるにきまつてゐるからである。三味線事件はこのやうにしてうやむやのうちにすんでしまつた。父母のはげしい叱責を期待し、その正面



衝突によつて局面の打開を企圖してゐた三郎の計畫は晝餅に歸した。ところが、龜之助は或る日町に出て二挺の三味線を買つて來た。どちらも大人持である。今度は小梅のかはりに龜之助が弟子になつた。小梅はもう少し大きくなつてから教へるといふことになつた。三郎の疝癪を恐れたのである。それから毎日のやうに縁側で、この夫婦は三味の稽古に熱中した。四十を越えたばかりのときは、下品ではあつたけれども、抜けきらぬ阿娜つぼさがあつた。まのびした女の顔が三味線をひきはじめると奇妙にひきしまり、眼が光つて來るのを、正面に向きあつた龜之助は胸をさされるやうに恐しいものを感じた。師匠は稽古になると弟子が子供であらうと老人であらうと少しも變ることはなかつた。三郎はこれを眺め、この唾棄すべき風景に涙が出んばかりであつた。三福湯の番臺にはそれからお河童の小梅の姿が見られた。

家庭風呂が流行しはじめると眼に見えて浴客が減つた。大いいていの家は簡便な据風呂を備へるやうになつて、入浴客は大部分労働者で占められるやうになつた。その少し前にこの三福湯の権利を自分一人で買ひ取つてゐた龜之助は月々の利子も相當に嵩んでゐた折からとて、相當に打撃をうけた。赤瀬春吉の父が卒中でたはれた時に三福湯が熱すぎて死んだなどといはれたことは何よりもいやなことであつた。あれ以來、どことなく赤瀬とも氣まづくなつてゐたし、もともと質屋である高巢小三郎の勘定高いことも小うるさいことであつたし、龜之助は遂にこの三福湯を買収する決心をしたのである。彼はもはや三福湯と運命を俱にしても悔いない覺悟であつた。さて金の工面を



するとなると、癩ではあるが、久賀國藏の門を潛るより外はなかつた。

「小父さん、又、來たね」

と白面の金貨は笑つた。彼は又も定紋つきの茶器で出しがらの茶をのまされた。よくも小父さんはこれまであんなぼろ風呂を守つて來たもんだねえ、僕等も小さい時にや小父さんの蜜柑にだまされて角力をとつたもんだ、この足で（と夏といふのに白足袋をはいてゐる華奢な足をたたいて）あの風呂の土臺の赤土を踏みかためたんだ、まんざら僕に縁のないこともない、僕は小父さんから貰つた青い葉のついた蜜柑のおいしかつたことを忘れてゐないよ、あの風呂のためなら僕は小父さんにどんな應援でもするよ、と、國藏は美しい顔をいつばいに綻ばせて哄笑したのである。

三福湯を藥湯にすることを考へた。家庭風呂に對抗するためである。たま

たま別府で作つてゐる或る藥を賣り込みに來た者があつた。その藥品は沸いた湯の中に一合ほども垂らしてかきませると一坪半の浴槽全體がたちまち白色に濁濁してしまふほど強烈なものであつた。硫黃に似た臭氣があつた。それは、第一、非常に暖まる、保温第一冷症の人、血液の循環を良くし、食欲不振を治し、病後の衰弱を回復し、神経痛、リウマチス、子宮病、血の道、痔疾——たいいていの病氣に特效があるといふのである。そんな風に宣傳したのである。このために來る客も増えたが、今度は澄んだ湯に入りたい連中が濁つた藥湯をきらつて來なくなつた。折角の考案ももとの杳阿彌である。そこで水湯と藥湯とを兩方つくることにした。その願書を出して許可を待つてゐるうちに或る日、とんでもない事件が起つた。近所で惣田のさいころ武やんと呼ばれてゐるばくち打ちが風呂に入つてゐた。外には誰も客はゐなかつ



た。武やんは湯槽につかつて、咽喉にひつかかつたやうな聲で浪曲をうなつてゐた。すると入口からのそりと一人の男が入つて來た。黒い着流しに幅廣の縮緬の廻しをしめてゐるのはすぐに遊人とわかる風體であつた。その姿を見ておどろいた武やんはすぐに湯の中にもぐつてしまつた。入つて來た若い男は上りこんで浴槽に近づいて來た。彼は懐にのんでゐた二尺ほどの日本刀をとり出し、それを引きぬくと浴槽の縁に足をかけて、湯の中をそれでむやみにかき廻した。白濁した湯のために何も見えなかつたが、彼はその中に武やんが沈んで居ることを知つてゐたのである。やがてまつ白な湯の面には牡丹の花がひらくやうに血がさつと吹いたが、その中にほかつと一本の腕が浮び上つた。その腕には一面に櫻の花の刺青があつて、木片のやうに浮き上ると、くるくると二三度廻つた。それを見ると刀を持つた男は急にさつと青く

なつて、いきなり刀を壁につき立て、一散に表に逃げ出した。これらの様子を番臺にゐた小梅が終始見てゐたのである。大騒ぎになつた。腕を切られた武やんは死ななかつた。殆ど半死半生であつたが病院に擔ぎこまれても、氣だけは確かで、見てろう、見てろう、と夢中で叫んでゐたさうである。風呂場にかけてつけた龜之助はきよとんとして番臺に坐つてゐる小梅の平氣な様子におどろいた。小梅はあはてふためいた父の顔を見るとかへつて不思議さうに、父ちやん、あそこに刀がある。といつた。太白コーコといふ靱霜焼の藥の廣告の白といふ字のまん中にきつさきが突き立てられてあつた。浴槽の中は血の海であつた。無論その日は營業をつづけるどころではない。縁起でもない、馬鹿な喧嘩をしくさつて、大損ちや、一日分辨償して貰はにやならんと、龜之助はいまいまして口の中で呟いた。番臺の上で平然としてゐた小



梅はまつ赤な浴槽を見ると、急に恐くなつて泣き出した。湯をすつかり棄てて、血を洗ひ落すだけでも大變であつた。翌日は山伏の總圓に来て貰つて厄拂ひをした。おまけに犯人が上らないために、警察の人が來たり、呼び出されたり、實地檢證をしたり、二三日間は商賣は休まなければならなかつた。四日目に犯人はあげられた。喧嘩の原因は女出入のやうであつた。その日に武やんは病院で死んだ。

これだから風呂屋は好かんといふのよ、と、とくは薄い唇をゆがめていつた。なにいふか、と龜之助はあわてたやうに怒鳴り、とくの顔をはげしく睨んだ。彼が女房に對してこのやうな權幕を示したのは初めてである。それは龜之助の心中にはからすも湧いた事業に對する不安の兆を、見すかしたやうにとくの出しやばつた言葉が發せられたからに相異なる。黄色い亂杓齒をむ

き出した彼の顔は不安の故にかへつて虚勢を示す猿のやうに見えた。とくはつまらぬことをいつたと、はじめて自分の言葉を後悔した。

さいころ武やんの乾分の者が三福湯を焼いてしまふといふ風説が傳はつて來た。親分をやられた腹いせにその遭難の場所である浴場を灰にするといふのである。これは筋の通らない話で、龜之助はそんな無茶なことがあり得ようとは信せられなかつた。然しながら、彼は毎夜、抜刀して浴場の周圍を警戒した。質屋の高巢が質流れだといつてくれた備前物の日本刀である。恨みのあるのはかへつてこちらで、お門違ひの恨みを受ける覚えは毛頭ないと思つたが、相手は無法者だから、何をするかわかつたものではない。火をかけられてから後で騒いだところで追つつかない。彼は膽もあまり大きくないし、腕力にも自信がなかつた。然し、自分の浴場に手をかける者があつたら死を



賭しても開ふ決心であつた。

戦争が初まると、何よりも石炭の買ひ出しに骨が折れるやうになつた。高くなつた上になかなか手に入らぬ。高い金を出してやうやく買ふと、まるきり泥のやうな炭でそのままでは焚くことが出来ない。ひどい時には石にコオルタルを塗つたのが混つて来る。他の町では湯屋組合で共同購入をしてゐるのに、この町では石炭商がそれをさせないために別個に高い石炭を買はねばならぬ。湯錢を上げたり、朝湯を廢したりした位ではなかなか追つかぬ。しかし、そのうちによくしたもので、石炭が手に入らなくなつたために家庭風呂のあるところも焚くことが出来ず、入浴客はしだいに増して来た。風呂屋では毎日のごとく次第に擴大してゆく戦争のことで話題は賑はつた。そのうちにこの町から出征して行つた多くの兵隊のうち、遺骨になつて歸つて来る者が次々に出来て来た。

る者が次々に出来て来た。

風の強い日に龍舌蘭の葉が吹き折られることを心配して屋根に上つた龜之助は、風に吹きとばされて、龍舌蘭の鉢とともに地上に落ちた。したたかに腰骨を折つた龜之助は起き上ることも出来ず床についてしまつた。彼は身體の弱りを感じるるとともに自分も來年は還暦であることにはじめてのやうに氣づいた。すると、どうも折り合のよくない女房と三郎とのことがたまらない不安になつて来た。三郎が家を出ようと決心して居ることがつきりと見えてとられ、明日にも、いや今日にも居なくなつてしまひさうな氣がしてならなくなつたのである。彼は妻と三郎とを枕元に呼んだ。彼は二人の顔色をうか



がふやうにしながら話しはじめた。

「外のことではないけんどな。今日、寝とつたらひよつくり、思ひ出したんぢや。若い時のことをな。聞いてくれるかなあ。まあ、聞いておくれ。實はわしは家出息子なんぢや。それといふのが、わしが小さい時に世話になつて親がはりになつとくれとつた嫂といふのが、どうもかうもいけん奴でなあ。わしをこきつかふ。わしの陰口を兄にいふ。田舎に居る一番上の兄だ。それはよいが、わしに小使を五錢くれても、兄には十錢やつたといふ。髪つみに十錢貰つても十五錢やつたといふ。それがいやでな。外にもいろいろわけがあつたがたうとう家を出ることにきめた。ところで無一文ぢや出られん。親父が山を賣つて七百圓ばかり持つてゐたのを知つとつた。それを持ちだすことにした。恰度兄夫婦は伊勢詣りに行つて留守ぢや。ところがその金の入つ

てゐる簞笥の鍵は嫂が持つて出とる。そこで腕白仲間の鍛冶屋に行つて合鍵をつくつて貰つた。簞笥の鍵穴に墨をつけて半紙でべつたり押しして型をとつて行つたんぢや。その作つた合鍵がちやあんと合ふ。あけて見ると、銅貨銀貨紙幣などがざくざく入つてゐる。そのうち二百圓ばかりとつて懐に入れてみたが氣がとがめた。折角親父が骨を折つて作つた金を二百圓も持ちだしてはすまんと思つて、三十圓だけにした。そして、三十圓拜借仕候といふ證文を残した。それは又嫂がかへつて来て、龜が三百圓持ちだしたなどといはれたり困るからだ。そこで恰度夏ちやつたが、着換へなども風呂敷にしたりして持ち出すと目立つので、着物を四枚着こんで家を出た。汗がどんどん出た。町に出て友達をよんでな、飯をおごつて女を買うてやつた。それがなんもかんでも五圓。下宿代が一日十一錢位の時ぢやからな。そこで支那かばんや安



い背廣の三つ揃ひなどを買ひこんで、それでも十五圓ほどあまつた。その時の十五圓といや、今にしたら百五十圓もの上も価値のある錢ぢやらうのう。それで港に出て舟で岡崎まで行つた。夜着いてぶらぶらして居るうちに電氣の明るい盛り場に出た。そしたら、鐵砲打ち場があつたんでそれを初めた。一回五錢ぢや。的が落ちたら大當といつて煙草が十箇位當る。なかなかあたらん。それを一べんに十箇位づつ買うて射つた。馬鹿なことをしたもんで、それで一圓五十錢もつかつた。すると横に立つとつた男が、見りや子供のやうぢやが、もう止めたがよい、旅の様子らしく見うけるが何か目的があつて来たか、と聞くのぢや。そこで行くあてもないといふと、そんならわしが良いところを世話しよう、ついて來なさい、といふ。半信半疑でついてゆくと、急に暗い露次に入つた。しまつたと思つた。鐵砲をうつ時に懐中のあけせき

したのでこの男はそれを見とつて俺をおびき出した追ひはぎに違ひない。さう思つたので俺は果物ナイフをひろげて、懐手をして、金を出せ、といふたら刺してやらうと思ふとつた。もういふかももういふかと思つてゐたがなかなか云はぬ。そのうちにまた明るいところに出た。それは追ひはぎではなかつた。一軒の家につれて行かれると大工の家ぢやつた。その日からそこに厄介になることになつた。ところがわしが田舎に居る時に木を伐り出しに行つたことがあるので、木を挽くことは心得てゐる。身體はこまかいが力も強かつた。そしたらみんながこりやええ木挽きになるぞといつて感心した。冗談ぢやないわい。木挽きなんどになるために家出したんぢやない、とこつちは腹の中で笑つとつた。ところが、風呂屋になつてしまふたが、まあ、木挽きと風呂屋とどつちがええか、そんなことどうでもええ。風呂屋がええとせにや仕様



がない。(龜之助はおどおどしたやうに笑つて)ところが一週間ばかりたつた時に、わしは芝居小屋の前に立つて看板を見とつた。今でも覚えとるが、先代萩がかかつとつた。朋輩とその晩見に行く約束をしてあつたのだ。わしがぼかんと看板を見あげて居ると、誰か後からぼんと肩を叩いた。ふりかへつてみると、わしはびつくりした。田舎の小學校の先生が後に立つてゐる。そして、龜さん、お父さんが心配して來とられるで、と云うた。見ると、一町ばかり先の町角に親父がちつと立つてこちらを見てゐる。禿げた親父の丸く尖つた頭が光つてゐる。わしはしまつたと思つたのちやが、もう一つの心はうれしゆうてたまらなんだ。親父は近よつて來て、何もいはなんだ。しばらくして一言、年よりにあんまり心配かけんなや、と云うた。それきりうんどもすんとも云はん。しかしその一言がわしの胸にびんとひびいた。それか

ら親父と一緒に郷里へかへつたが、わしは親父の死ぬまで田舎で百姓をした。それからは嫂も可愛がつてくれて、家の中は氣持良うなつた。つまらん長い話ちやつたが——」

實はわしの話したいことは、と、改めていらぬ説明する必要はないと龜之助は思つた。これは龜之助にとつては一世一代の寓話であつたであらう。しかしながらこのイソツブ物語は彼の豫期に少しく反した結果を齎した。三郎が自分に反感を持つて家出をしようといふやうな大それた考へを抱いて居るといふことは、鈍感な多くの全く想像だにしてゐないことであつた。龜之助のだからした話はそのことをとくに知らしめた。彼女は切れの長い眉をよせて薄い唇を噛み、簪を抜いてやけのやうに頭髪をかいた。それからふいと立つて表に出て行つてしまつた。三郎の家出の決意はいつそう堅いものにな



つた。

このやうな時に、年の終りに近い或る日、三郎に召集令状が来たのである。第二乙であつた三郎は補充兵として出征するのである。このことは一家の者に別々な氣持で何かほつとさせるものがあつた。ただ兄がゐなくなるといふことで小梅ばかりが純粹な悲しみを持つて泣いた。家の前には「祝出征清水三郎君」といふ旗が何本もひるがへつた。多くの人が来て祝ひの言葉を述べた。近所の挨拶もすみ、入隊の前日にはごく内輪ばかりの送別宴が張られた。親族の者達の外に、赤瀬春吉や高巢小三郎の顔も見られた。赤瀬は三人の息子の中、二人までも戦地に出してゐた。赤瀬の志になる頭つきの大鯛が膳につけられた。酒が廻つた。まだ少し無理であつたが、龜之助も起きて来て膳についてゐた。座が次第に賑やかになつて来た。いける口の高巢はもともと

遠慮のない男であつたので、めでたい、めでたい、といひながら、つづけさまに盃を干して一番に酔を發してゐた。禿げ上つた額に手拭で鉢巻をして日の丸の扇をはさみ、眼を細めて彼は、庭の砂いさごは金銀のとうなりだした。大兵肥滿の高瀬はあまり飲めないで僅かな酒にもうまつ赤になつてふうふうと苦しさうに息をついてゐた。話題は三福湯を初めた當初のことに花が咲いた。水管式の罐に湯が沸かないので、赤瀬の家で湯をわかしてバケツや盥で運んだことなどが、身振り手まね入りで繰りかへされた。皆はにぎやかに笑ひ興じた。龜さんが一番ええことしたばい、こつちたちや骨折つて、ただで風呂に入る位が關の山たい、と小三郎が額を扇ではじきながら云つた。龜之助はこの言葉をきいてぎくりとした。酒がさめて来る思ひであつた。座が妙に白けた。とくが三味線を出して来た。一挺を龜之助にわたした。



「さあ、父ちゃん、今夜はひとつ連れ弾きでもして三郎を氣持よく送つてやりませうや」

さういひながら、とくは膝の上に三味線をおき、糸をしめ、ビーンビーンと調子をしらべた。うつむいた丸髻が水々しく電燈の光に黒光りしてゐた。龜之助はだまつて三味線の調子を合はせた。やがて、とくの音頭で二人の三味線が初まつた。松のみどりである。とくは弾きながらひくい聲で唄つた。

今年より

千度むかふる

春ごとに

なほも深みに

松のみどりごと

……

一座はこの観物に眼を集めた。二人の三味線はまるで一人で弾いてゐるやうに、上調子と本調子とがびつたりと呼吸を合はせて亂れず、高く低く、早くおそく、自在に動く撥のきつききから玄妙の音色がこんこんと溢れ出して來た。眼に見えぬ音色の波がひしひしと二人をつつんでしまつてゐるやうにさへ感じられた。驚いたのは三郎である。三味線は下賤の音楽であるといふ確信や、三味線なんぞ好きになつたらおしまひぞ、といった伯父の言葉などはもはや全く彼の心底になかつた。彼はこの愚劣なる父と愚劣なる母との微妙な呼吸の一致に呆然となつてしまつたのである。これは單に三味線の上達によつて生じたものではない。彼は音響の中に端坐してゐる父母の姿に近より難い嚴かなものを感じた。これはどういふ精神であらうか。ともあれ、自



分の輕蔑した愚劣なるこの夫婦は自分の留守中にもうまくやつて行くに違ひない。彼は心あたたまる思ひがした。彈奏が終るときかんな拍手が起つた。

しかし、三郎の氣持はそれを拍手をもつて稱揚するとき輕薄なものではなかつた。彼は兩手を膝につき、ちつと見なほす思ひで兩親を見た。すると、とくの顔色がさつと變つた。見る見る彼女の顔に憎惡の色が浮んだ。切れの長い眉がひきつたやうに動き、この痲性の女はいきなり二挺の三味線をひきつかむと、はげしく席を蹴つて奥にかけこんだ。龜之助が困つたやうに、どうして手をたたいてやらんかや、とぼそぼそした調子でいつた。もう、どちらでもよい、と三郎ははればれした心で思つた。

入隊する日の早朝、龜之助は暗いうちから起きて風呂を沸かした。三郎を入れるためである。最近の營業は午後三時からなのであつて、朝湯は全然廢

止されてゐるのである。滿々とたたへられた新鮮な浴槽に三郎は一人入つた。さまざまなものこそぎ落すやうな氣持で彼は身體を洗つた。三郎が湯から出ると、龜之助は栓を抜いてその湯を流してしまつた。三郎は多くの人々に送られて入營した。とくは送つて行かなかつた。

龜之助は猫背をいつそうそ寒さうにちぢめながら、久賀家の冠木門をくぐる。筒袖を前でつなぎ合はせて小さきみに飛び石の上を歩いてゆく。小父さん、また來たね、と子供のやうな聲で冷笑されると思ふとやりきれないが、仕方がないのである。この頃は、人にものを頼むのによい口實が出來た。うちの忰も出征してゐますので、といふと、それではといふのでいくらか特典



がある。戦地の兵隊のことをもう少し内地の人が考へてやらんといかん、といふやうなことを彼もいふやうになつたが、三郎が出征するまでは彼はそんなことは少しも考へなかつた男である。しかし、久賀國藏にかかつては、悴を戦地に出してゐるから、といふやうなことが少しも效能がないのである。このやうな生白い子供にいやうに操られることを思へば癪であるが、背に腹はかへられない。彼の脳裡にはつきりと「水因三昧」の大額がうつつて来た。あの字の消えるのと自分の生命とどつちが早いだらうかとふとそんなことが考へられた。

## 雨後



にふい音が聞えてゐる。その間に少しちがつたにふい音が入る。話し聲が入る。深夜である。夜明けに近いかも知れない。別に気にせず、またやつてるなどと思ひ、研吉は起きてみる氣もなかつた。話し聲といふのもただ母がときどき何かいつてゐるだけで、答へる父の聲はしなかつた。晝の疲れで（どうしても父の顔を立てねばならぬために斷わりきれず、この町から汽車で二時間ほどかかる田舎に行き、晝はその村役場で講演をやり、夜はまたそこから一里ばかり離れた漁村に行つて、やつと終列車で歸つて來たのである。）